

多気郡明和町

斎王宮跡発掘調査報告 I

1974

三重県文化財連盟

序

開発事業に先立ち、埋蔵文化財を積極的に保護していくために、本県では遺跡分布調査遺跡地図作成あるいは埋蔵文化財保全計画策定などを行なってきました。

今回、「風土記の丘、史跡公園」建設構想のひとつとして、昭和48年度、国庫補助を受け斎王宮跡の範囲確認調査に着手いたしました。

斎王宮跡と推定される地域でも住宅化の波がおしよせています。古里遺跡の調査とともに、一日も早く、正確な位置を明らかにし、古代斎宮寮の復原ならびに埋蔵文化財の現代的活用の施策をうちたてたいものです。

調査に際しては、明和町および明和町教育委員会をはじめ、地元斎宮地区のかたがたに多大のご協力をいただいたことに対し、深く謝意を表するものであります。

昭和49年3月31日

三重県教育委員会

教育長 清水英明

例　　言

1. 本書は、三重県が国庫補助金の交付をうけて、三重県教育委員会が調査主体となって実施した、「風土記の丘・史跡公園建設調査」斎王宮跡範囲確認調査の結果をまとめたものである。
2. 発掘調査後の出土品整理は山沢、谷本が、報告書作成は谷本が行なった。
3. 発掘調査にあたっては中川栄之助氏をはじめとして、地元牛葉、竹川、金剛坂部落の方々の協力を得た。
4. VIIのプロトン磁力計による磁気探査結果については大阪府教育委員会文化財保護課技師中村浩氏、大阪大学基礎工学部河合研究室鳥居雅之氏の測定による。報告書作成についても種々御教示を得た。
5. 本書の遺構標示は下記の略記号による。

S B 竪穴住居址・掘立柱建物址

S D 溝　　址

S K 土　　塙

S E 井　　戸

P L 4 ~ 6 の凡例は次の通りである。



目 次

I	前 言	1
1)	調査に至る経過	1
2)	調査経過	2
3)	調査の方法	3
II	位 置	4
1)	位置・地形	4
2)	斎王宮跡周辺の遺跡	4
III	A トレンチの調査	6
IV	B トレンチの調査	9
V	C トレンチの調査	12
VI	D トレンチの調査	19
VII	E トレンチの調査	25
VIII	プロトン磁力計による磁気探査	27
IX	結 語	29

図 版 目 次

P L 1	斎王宮跡周辺小字名図
P L 2	斎王宮跡位置図
P L 3	斎王宮跡地形図
P L 4	Aトレンチ平面図
P L 5	B・Cトレンチ平面図
P L 6	D・Eトレンチ平面図
P L 7	A・Bトレンチ土器実測図
P L 8	Cトレンチ土器実測図
P L 9	Cトレンチ土器実測図
P L 10	Cトレンチ土器実測図
P L 11	Dトレンチ土器実測図
P L 12	Dトレンチ土器実測図
P L 13	D・Eトレンチ土器実測図
P L 14	Eトレンチ土器、石器、土製品実測図
P L 15	磁気探査地点および測定値表
P L 16	磁気探査地点および測定値表
P L 17	遺跡遠景、斎王の森
P L 18	Aトレンチ
P L 19	S D 2、S D 5
P L 20	S D 7、S B 10
P L 21	Bトレンチ
P L 22	Cトレンチ
P L 23	S B 45、S B 60
P L 24	S D 38・40、S D 47・48
P L 25	Dトレンチ、S B 65
P L 26	S D 55・56、S E 64・65・66
P L 27	Eトレンチ、S D 78・79
P L 28	S D 76・77、S D 78
P L 29	奈良時代土器
P L 30	奈良時代土器・平安時代土器
P L 31	平安時代土器・玉石
P L 32	高杯・甕・縁釉片・砾石・土錐・フイゴ羽口
P L 33	瓦片・磁器片
P L 34	鎌倉時代土器

I 前 言

1 調査に至る経過

昭和47年1月 古里遺跡B地区の発掘調査に於いて発見された蹲脚硯の破片は、数棟の掘立柱建物址とともに、古里遺跡を大規模な中世村落であるだけでなく、奈良時代に属する地方政府的な性格と考えなくてはならなくした。そして、東方 600mの個所に碑が建てられている斎王宮跡との関連がにわかに注目され出した。古里遺跡のすぐ西を轄川が流れ、斎王は古里遺跡のどこかを通って斎宮寮に入ったはずである。

一方、明和町に於ける埋蔵文化財の調査は、昭和45年の古里遺跡の試掘調査の後、金剛坂遺跡、発シ遺跡が、昭和47年度には神前山古墳が、そして今年度明星古墳とてつづけに調査されてきた。これらの調査はいずれも土砂採取や宅地建設という開発行為によるものであった。その上、調査された遺跡、古墳は県下でも有数の埋蔵文化財で、これらの開発行為による破壊はその都度明和町のみでなく、県下の文化財保護に対する大きな問題となつた。これは後述するが、明和町は県下でも埋蔵文化財の宝庫ともいえる地域であり、同町内の開発行為には常に文化財保護の問題がからんでくるのであった。

昭和47年2月、古里遺跡の保存を訴える人々によって「古里遺跡を守る連絡協議会」（会長 服部貞藏三重大学教授）が組織され、地元明和町においても、「明和町郷土文化を守る会」（会長 世古口民三氏）が結成され、これら両組織による講演会も幾度か開催され、文化財の保存が強く訴えられるとともに、斎王宮跡の関心もたかまってきた。その反面、斎王宮跡の碑の建てられている斎王の森の周辺にも宅地化の波がおしよせ、今まで大根畠であった所が突然家が建ちはじめるといった状況である。数年前に撮影した航空写真を見ても、新しい家が次々と建てられていることがわかる。

崇神天皇の御代にはじまったとされる斎王の制度は、天武天皇の御代に確立し、約 660年の長きにわたって続けられたとされている。斎王は歴代天皇の即位に伴ない、伊勢国多気郡に設けられた斎宮寮に在任した。斎宮寮は、「竹の都」とも呼ばれた相当大規模なもので、方 2町はあつたとされている。しかし、廃絶後の斎宮寮は次第に人々に忘れられ、荒れはてて、その具体的な位置さえわからなくなつた。その後、一部の人々によって、文献の上から斎宮寮の研究の進められたこともあった。また斎宮寮の保存を訴えた人もいた。昭和 2年には県史跡に一部分指定されたが、戦後には解除されている。現在近鉄斎宮駅の北方の林の中の碑の建てられている部分で、そこは戦後伊勢神宮に寄贈されたものである。しかし、この部分が斎宮寮のどの部分にあたるものかは全く不明である。

2 調査経過

廃絶後600年あまり静かに地下に眠っていた斎王宮跡が、宅地化によって破壊されていくのを、このままにしておくことが出来ず、三重県教育委員会としても、古里遺跡とともに「風土記の丘・史跡公園」の構想のもとに斎宮寮の実態を把握することになった。

昭和47年度、古文献から斎宮寮の調査を、京都大学工学部・修景計画研究会三重作業グループ（代表 福山敏男氏）に委託した。そして、48年度には範囲の確認のための発掘調査を行なうことになった。

御巫清直氏の斎宮寮廃蹟考によれば斎宮寮は斎王の森の南に広がり、旧参宮道の南にまで広がっていたとされている。地元の人々の言い伝えによっても同様である。現在、斎王の森と近鉄線の中間部は一段低い水田となっている。この部分は古く瓦粘土を採掘した個所であるといわれている。現在、新しく家が建ちはじめている斎王の森の裏手の畑は戦中、戦後を通じて開墾された畑である。今年度は、この斎王の森の裏手の畑を中心にトレーニング調査をすることにした。この部分は殆んど明和町牛葉部落の人々の所有地であった。

48年8月、地元牛葉部落に於いて発掘調査の了解を得るため説明会をもった。調査対象地区は、4月より8月にかけては夏野菜、煙草が、8月より12月にかけては大根が全面作られる状態であり、このため、発掘調査も作物のない冬場に実施しなくてはならないと考えられた。地元説明会においてもこの点が話しあわせた。その後、明和町役場で調査対象地域の地籍および所有者をしらべる作業があった。10月、古里遺跡の調査を始め、それに引き続き斎王宮跡の調査を始める予定であった。12月19日、再び地元説明会をもち、発掘調査の承諾を得ることになった。それに先立ち、調査指導の先生方を委嘱し調査方法を検討し、調査を1月初旬に始めることにした。

12月末、調査トレーニングを設定するとともに、磁気探査（プロトン磁力計）による遺構調査を大阪府教育委員会の協力を得て行なった。この結果については図面に詳述した。

年があけた49年1月9日、調査地点において、県教育委員会教育長、明和町長、町教育委員会教育長をはじめとして、地元各位の出席を得て鍵入式を行ない調査を開始した。発掘調査は、地元斎宮地区の方々の協力を得て2月末まで延40日に亘って行なった。この間、明和町（吉田松雄町長）、明和町教育委員会（潮谷英一教育長）、斎宮小学校（竹内良一校長）牛葉部落（森下幸太郎部落長）をはじめ、地元各位には種々ご協力、ご配慮を頂いた。特に、土地所有者の方々には作物の植付その他でご迷惑をおかけした。記して謝意を表したい。

調査は次の体制ですすめた。

調査主体者 三重県教育委員会

調査指導者 福山敏男（京都大学名誉教授）

坪井清足(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)
服部貞藏(三重大学教授)
榎崎彰一(名古屋大学助教授)

調査担当者 小玉道明(三重県教育委員会文化課主事)
下村登良男(同上)
吉村利男(同上)
伊藤久嗣(三重県教育委員会文化課技師)
山沢義貴(同上)
谷本銳次(同上)
吉水康夫(同上)

調査協力機関 松阪教育事務所
明和町
明和町教育委員会
明和町立斎宮小学校

3 調査の方法

今年度の調査目的は、斎王宮の範囲を確認することであった。斎王宮を取り囲む堀あるいは築垣といった遺構の検出につとめることにした。このため、幅4mのトレンチを設定して調査を行なうこととした。

調査に先立ち、調査区の呼称について検討した。大グリッドを設定して、更に個々の畝に名称を与えることを考慮したが、今回の調査対象地点が斎王宮の内側か、それとも全くはずれた場所であるか予想が出来ず、その上トレンチ調査のため呼称が雑になることを考え、今回は各トレンチに別々に呼称を与えることにした。そして、トレンチによる調査の後、大グリッドおよび個々の畝に名称を与えることにした。

トレンチは、まず斎王の森より真北に向ってAトレンチ(290m)を設定し、更にAトレンチより東に向うB(241m)、C(240m)トレンチを、そして斎王の森の東にD(134m)、E(31m)トレンチを設定した。そして、それぞれ西、北より1区、2区と呼称することにした。

Aトレンチは当初、真北に入る予定であったが、手違いによりAトレンチの主軸はN 5°41' Eをさすことになった。他のトレンチはいずれもAトレンチに直交する。

II 位 置

1 位置・地形

伊勢平野の南部を流れる櫛田川および宮川はともに県境の紀伊山地に源を発し、ほぼ北東に向かって並行して流れている。多気郡明和町はこの両河川によって形成された段丘上および沖積地に位置している。伊勢湾に面する北部は第四紀新層（沖積層）に、そして南側は第四紀古層（洪積層）の段丘面に、最南端の丘陵は第三期層露出地域となっている。段丘は更に最低位段丘と低位段丘に区分される。最低位段丘は標高20m程度よりゆるやかに北に向かって傾斜しており、斎王宮跡はこのほぼ中央部西寄りに位置している。標高10m前後である。この段丘の西端に古里遺跡があり、すぐ下を櫛田川の古流といわれる祓川が流れ、その沖積地との比高4mである。

前述の如く、今年度の発掘対象地区は戦中、戦後を通じて開墾された畑で、一部分林のまま残っている個所もある。近鉄斎宮駅の北北東500mである。小字は「楽殿」に属して、BトレンチとAトレンチの北側部分は「苅干」に、Dトレンチの東側部分は「西前沖」に入る。楽殿、苅干の境界部分は僅かに低くなり、開墾時には浅い堀が走っていたということである。楽殿の南側には「下藪」「御館」といった小字が、西側には「篠林」が、その南に「上藪」「宮ノ前」といった小字がある。

今回の調査地点は行政的には多気郡明和町斎宮字楽殿2883, 2885~2887, 2897~2914, 2917~2918番地、字苅干2845~2846, 2857, 2862~2869番地、字西前沖2647, 2649番地にあたる。

2 斎王宮跡周辺の遺跡(PL 2)

櫛田川、宮川は古くより重要な文化交流ルートであり、先土器時代、縄文時代の遺跡、遺物もこの両河川の中流域に比較的多数認められ、県下でも最も古くより拓けた地域と考えられている。しかし、下流域の明和町内においては縄文時代の遺跡としては、斎王宮跡の南西方2.4kmの金剛坂遺跡（2）があるのみで、弥生時代においても同遺跡と神前山古墳群（3）および古里遺跡（4）等があげられる程度である。古墳時代になると明和町、玉城町、多気町の境界の丘陵上には数多くの古墳が築造され、有数の古墳密集地域である。全23基の天皇山古墳群（7）、全16基からなる斎宮池古墳群（10）をはじめとして、総数約240基の古墳が認められている。この丘陵の周辺には古墳時代の集落が存在するものと思われる。古墳時代の遺物を出土する遺跡には金剛坂遺跡、古里遺跡がある。斎王宮跡の周辺にも古墳時代後期の古墳が認められる。古里遺跡との間にある

塚山古墳群（6）、西北方の以前は百基以上あったといわれる坂本古墳群（5）がある。既に当時相当の豪族がこの地を治めていたものと思われる。飛鳥・奈良時代の遺物も金剛坂遺跡、古里遺跡から出土している。特に古里遺跡は斎王宮跡と深い関連をもつ遺跡であると思われる。古墳時代以降当地域は大和とのつながりが次第に強くなってくる。

宮川流域の遺跡については「南勢バイパス埋蔵文化財調査報告」に詳述されているため割愛する。ここでは斎王宮跡に関連する遺跡との位置関係について述べてみたい。斎王宮跡より伊勢神宮は内宮14km、外宮10kmの東南東にある。天長元年にうつった度会の離宮（21）は国鉄宮川駅の南である。伊勢神宮神痔のあったと伝えられる鳥墓神社（22）は3km東南である。斎王第43代隆子女王の墓（23）は北方1.8kmにある。また、古里遺跡の西南隅に石碑の建てられた森がある。ここが式内社竹神社（24）の合祀される前の場所である。

III A トレンチの調査

斎王の森の真裏、南北に走る290mのトレンチである。ほぼ平坦で両端の比高は65cm。層序は耕作土、黒色土、地山である。耕作土は15~20cm前後。黒色土は20~30cm程度であるが、中央部分では耕作土下にすぐ地山となる。地山まで地表より北側では45cm、中央部で30cm、南側で50cm程度である。地山は中央部東寄りでは白色かった砂質土であるが、他の部分は全面黄褐色土である。黒色土との間にやや黒っぽい黄褐色土が5~10cm程度部分的に見られる。また、北端より82~86mの個所で、耕作土下に厚さ5cm程度焼けた部分が見られた。Aトレンチからは他のトレンチに比べて遺構、遺物の発見は少なかった。

1 遺 構 (PL 4)

(1) 奈良時代の遺構

SD 2 北端より28mの個所で検出。幅70cm、深さ30cm、東西に走る細い溝である。埋土は黒色土、黄褐色土混入の黒色土である。すぐ南に径40cmの、北には110cmのpitが見られる。土師器甕、甌、杯(1~4)が出土。

SD 3 SD 2 の南15mの個所。幅2.5m、深さ8cmの浅い溝である。溝底は拳大の礫層となる。横瓶、平瓶、杯、甕(9・10)等が出土。

(2) 平安時代の遺構

SD 7 Aトレンチの南端より62mの個所。溝方向はN 38°Eを指す。幅1.6m、深さ60cm。北側は二段になる。Cトレンチにつづく。土師器杯、甕、灰釉陶器片(15)が出土。

SD 9 SD 7 の南22m。幅1.2m、深さ50cm。溝底は平坦で断面は逆台形を呈する。溝方向はE 32°Wを指す。土師器甕、杯片、灰釉陶器片も出土している。すぐ北側にはSD 8 が走っている。

SB 10 Aトレンチの南端より9mの個所で検出。3間×4間の掘立柱建物址と思われる。建物の棟方向はE 20°Wを指す。柱穴は径60cm、深さ40cm程度である。柱穴内から土師器甕、杯片が出土している。また、同地点の耕作土下からは風字硯(7)の破片が出土している。

(3) 鎌倉時代の遺構

SD 11 Aトレンチの南端で検出。幅1.6m、深さ65cm。溝方向はSB 10と同方向である。土

師器鍋片とともに山茶椀片、常滑焼の破片、白磁片も出土している。

(4) そ の 他

S D 4 S D 3 の南28mの個所。幅2m、深さ40cm、溝底は平坦である。溝方向はE36°Wを指す。遺物は一点も出土していない。

S D 5 小字樂殿と苅干の境界部分で、Aトレンチ北端より114mの個所。東西に走る。北側は不明であるが、幅3.2m程度、深さ2mを測る。埋土は黄褐色土と黒色土もしくは暗褐色土が交互に堆積している。地山は50cm程度は黄褐色土で、それより下は礫を多く含む層が80cm程度あり、更にその下は砂礫層となっている。戦後の開墾時には深さ1.3m程度の堀となっていたものと思われる。遺物は一点も出土しなかった。

以上の他にS D 9 の南6mの個所に於いて土塙SK 12の一部が見つかっている。須恵器甕(8)が出土。S D 8 の北側に於いても土師器高杯、甕(5)の破片が出土している円形の土塙SK 13がある。また、遺物は出土していないが、幅70cmの細い溝S D 1・6がある。

2 遺 物 (PL 7)

(1) 奈良時代の土器

— 土 師 器 —

甕(1) 口径24cm、器高31cm、両側に把手がつけられ、底部は半円形の蒸氣孔があく。表面は把手下部分までは粗い刷毛目が、それより下は細かい刷毛目が縦方向に施される。口縁部は刷毛目のあとヨコナデ。内面は横方向の刷毛目で、下半部は縦方向にヘラケズリがされている。黄褐色を呈するややもろい土器である。

甕A(2) 口径17cm、器高15cmの小形品。頸部のみやや厚く、口唇部は僅かに立ちあがる。肩部分には粗い刷毛目がのこり、それより下は細かい刷毛目が縦方向に施される。これは粗い工具でまず一次調整を行なったあと細かい工具で仕上げの二次調整を行なったものと思われる。内面は横方向の刷毛目のあとヘラケズリしている。

杯A(3) 口縁部が内青気味に立ちあがり底面は平坦なあまり平滑でない杯である。

杯B(4) 口唇部が丸く肥厚する高台付の杯で、全體に赤褐色を呈し、全面ヘラ研磨された堅緻な土器である。内面には斜方向、螺旋状の暗文が施される。高台内面にもヘラによる暗文が認められる。

高杯(5・6) いずれも脚上部の破片で、赤褐色を呈する。面取状にヘラケズリされている。

— 須 惠 器 —

風字硯（7） 脚部の破片である。幅11cm、長さ17cm程度と思われる。脚は七角形となる。上面は灰色を呈し、裏面には濃緑色の自然釉が全体にかかっている。

甕（8） 口縁端部のみ僅かに内寄する厚手の土器で、口縁外側に稜を有する。頭部はあまりくびれず、肩部も張り出さない。表面は平行叩目が、内面には同心円叩目が施される。青い白灰色を呈する。

平瓶（9） ラッパ状に開く口縁部は直すぐ立つ小形品で、青灰色を呈する。底部はヘラ切りしており、底部近くはヘラケズリされている。

横瓶（10） 口縁部は短かくて厚手で、端部には沈線がめぐる。体部は内外面ともに平行叩目が施される。

蓋（11） 天井部分は厚手で、ヘラ切りのままである。口唇部はつまみ出されたようになる。

(2) 平安時代中葉の土器

— 土 師 器 —

杯（12・13） 12は外反する口縁部をヨコナデによって仕上げ、底部は指による押えのみのものである。13は高台のつく黒色土器である。

— 灰 釉 陶 器 —

杯（14） 浅い皿に近い器形で、直すぐ立つ高台がつく。内面および底部近くまで淡い緑色の釉が厚くかかっている。底部近くはヘラケズリされて稜がのこる。内面には重ね焼の痕が見られる。

椀（15） 白色に近い灰色の堅緻な胎土で、内面には黄茶褐色の釉が吹きつけられたようにかかる。表面にも釉がかけられている。

綠釉片 SB10とSD11との間で一片出土。濃緑色の釉がかかり、堅緻な土器である。

(3) 平安時代後半の土器

いずれも口縁部のみヨコナデをし、底部は指による押えの杯A（17）、小皿（16）がある。とともに細砂を多く含む。

(4) そ の 他

瓦（337～338） SB10の北8m付近より三点の瓦片が出土している。平瓦と丸瓦の破片である。凸面には粗い繩目叩目が、凹面には布目が認められる。

砥石（314） SD7の北側で出土。破片で現長7cm、幅2.3cm。三面を使用している。緑色片岩製。

IV B トレンチの調査

A トレンチの北端より47mの個所から東へ向って直交する 241mのトレンチである。このトレンチは幅2mで調査を行なったために遺構の検出はやや不明なものがある。層序は西側ではA トレンチとかわらないが、中央部分では地山は高く、耕作土20cm程度で黒色土の見当らない部分がある。東側ではやや深くなり、地山まで50cm近くある。遺構は浅い溝跡が殆んどである。遺物の出土も少ないので、このため、遺構の時代をきめがたいものが多い。

1 遺 構 (PL5)

(1) 奈良時代の遺構

S D21・22 トレンチ西端より東へ84mの個所。この二つの溝は6m程離れているが、その形状より、円もしくは方形につながる同一の溝跡と思われる。S D21は幅2m、深さ65cmである。耕作土下に暗褐色土、黒色土の埋土が見られる。土師器甕、甌、壺、須恵器杯(20~23・26)等が出土している。

S K25 東端より60m西。当初、住居址かとも考えたが、不定形を呈し、明確にし得なかった。土師器甕、杯(18・19・24)等が出土している。

(2) 平安時代の遺構

S D16 西端部で発見。幅2.1m、深さ30cm。溝方向N24°W。綠釉甕、須恵器杯、土師器皿(29・30)等が出土。

(3) その他の遺構

S D18・19 S D16の東40m。それぞれ幅80・120cm、深さ25・60cm。溝方向はN36°E。並行して走る。溝内からは遺物は一点も出土していない。周辺の小さなpitからは土師器杯片が少量出土している。

S D23 S D22の東16m。ほぼ南北に走る溝。幅1.5m、深さ50cm。土師器甕、杯の小片が出土している。更に20m離れて並行する溝S D24がある。遺物は一点も出土していない。

S D26 S K25のすぐ東側で検出。幅1.2m、深さ45cm。須恵器甕、杯の破片とともに小皿(31)も出土しており、鎌倉時代に下るものかもしれない。

S D27・28 東端近くではほぼ並行して走る二条の溝である。他の溝に比べてやや深く、溝底も

平坦で断面は逆台形となる。幅1.8・2.0m、深さ45・40cmを測り、S D28からは須恵器甕、杯片、土師器瓶片が出土している。

以上の他に小さな溝址、柱穴も多数みつかっているが、遺構として不明なものが多い。

2 遺物 (PL 7)

(1) 奈良時代の土器

— 土 師 器 —

甕A (20) 口径14cmの小形品で、表面は縦方向の刷毛目、内面はヘラケズリされる。暗茶褐色を呈し、細砂を含む。

甕B (18・19) 口縁部中央が僅かに肥厚する。外面縱方向、内面横方向の刷毛目が施される。19はやや器形が異なり、鉢形土器に近い器形で、胴上半部まで内外面ともにヘラケズリされている。

鍋 (21) 口径38cmの大形品で、口縁部は甕同様中央部が肥厚する。表面は縦方向、内面は横方向の刷毛目が全面施されている。

杯A (24) 口縁部が内弯し、この部分のみヨコナデ、底部は指による押えによって凹凸がある。黒っぽい灰褐色を呈する。

皿 (23) 口径16cm、器高2.7cmの浅い皿である。口縁部は端部のみくびれる。黄茶褐色を呈し、胎土は緻密である。

高杯 (25) 断面九角形の筒状を呈する脚部破片である。杯底部は脚部に比べて薄手である。赤褐色を呈する。

— 須 恵 器 —

杯 (22) 20・21同様 S D22から出土したもので、口縁部が真すぐ外方に開く。口径14cm。砂粒を含み、青灰色を呈する。

(2) 平安時代の土器

— 土 師 器 —

鉢 (26) 口径34cm、器高7.5cm程度。口縁部は反り気味に外方に開く。口縁端部は断面三角形となる。器厚7mmの薄手である。表面はナデツケによって調整されるが、一部分刷毛目がのこる。内面には細かい刷毛目が横方向に施される。黄褐色を呈する軟質な土器である。S D22から出土したもので、奈良時代に遡るものかもしれない。

杯A (27) 口径15cm、器高3.6cm。口縁部が外反する薄手の土器で、口縁部のみヨコナデを

する。

蓋 (28) 中央部が肥厚するつまみをもつ破片である。淡茶褐色を呈する軟質な土器である。

小皿A (31) 口径8.6cmの小形皿で、平安時代末あるいは鎌倉時代のものであろう。

— 緑釉陶器 —

椀 (29) 口径12.8cm、器高4.8cm。口縁部は薄手で内齊気味に反り出す。高台は外方に開く。杯底部には糸切痕がのこる。口縁部には輪花の刻目が見られる。内面には浅い凹線が一条めぐる。内外面ともやや緑がかかった灰色の釉があつくかけられている。胎土は黄白色で軟質である。

— 須恵器 —

杯 (30) 29とともにS D16より出土。口径16.5cm、器高5cm、口縁端部のみ外反する。糸切底で、低い高台が貼付けられている。うすい茶色がかかった灰色を呈する。

V Cトレントの調査

Aトレントの南端より67m北、東へ向って直交する240mのトレントである。Bトレントと200m離れて並行する。東へいくにしたがって徐々に低くなり、両端の比高は60cmを測る。西側ではAトレント同様、耕作土、黒色土、地山となり、地表より地山まで50cm程度であるが、東端近くでは浅く20~30cmで地山となる。遺構、遺物は多数見つかっている。

1 遺構 (PL5)

(1) 奈良時代の遺構

S K49 Cトレント西端より東62mの個所。楕円形を呈する。幅22m、深さ20cm。土師器甕、鍋、土錘(34・44・319)等が出土。

S K29 S K49の東12m。S D31のすぐ東側の土塹で東側部分のみ検出。深さ20cm。土師器鍋、甕、杯(71)が出土。上部からも杯(45・51)が出土。

S D32・33 更に東へ21mの個所、S D32はほゞ南北に走り、S D33はやゝ東へそれる。それぞれ幅100、60cm、深さ20、23cm、S D32からは土師器杯、甕、高杯片が、S D33からはカマド、甕、杯(41・70)等が出土。S D33のすぐ東にも不整形な並行して走る細い溝がある。

これらの溝の見つかった同区の上層からも土師器杯、甕(33・46・49・50・57・61)等多数出土している。また、すぐ東の区からは須恵器鉢、土師器甕、鉢(39・53・59・79・80)が出土。奈良時代に属するものが多く、平安時代に入るものも少量ある。

S B50 Cトレント東端より18m西。一辺3.5mの方形を呈し、地山上面よりの深さ僅か15cmと浅い。pitは二ヶ所ある。床面はあまり固くない、焼土は中央で僅か認められた。土師器甕、皿、須恵器蓋(36・37・40・48・52・54・60)等が出土している。

S D47・48 東端近くでは、並行して走る二条の溝。S D47の溝方向N56°E。幅75cm、深さ20cm。土師器甕、杯(35・56・94)等が出土している。

(2) 平安時代の遺構

S D7 西端部でAトレントよりつづく溝である。幅2m、深さ45cm。Aトレントでは溝中央に細い溝が二重に見られたが、この個所では明確にし得なかった。土師器甕、須恵器杯、蓋等が出土。

S D36 Cトレント西端より138m、S D40のすぐ西で、南北に走る細い二条の溝である。幅

45cm、深さ25cmと浅い。上部より土師器甕、杯、山皿（81・82・85・91・102・112・114・115・117・133・146・156）等が出土しており、平安時代後半のものと思われる。

S B45 Cトレンチ東端より62m西。一辺3.8mの方形を呈するものと思われる。耕作土下の黒色土上面より切り込んでおり、深さ50cmを測る。覆土は暗褐色土を多く混入する黒色土である。床面は比較的固く、柱穴、焼土は認められなかった。土師器甕、杯、須恵器蓋、灰釉陶器（77・84・88）等が出土している。

S B44 Cトレンチ東端より30m西。柱間は西側で1.6m他は2.1m。柱穴は径40cm、深さ30~40cm、柱穴の一つから高杯片が出土している。

(3) 鎌倉時代の遺構

S D31 S K29のすぐ西。幅50cm、深さ30cmで、ほぼ南北に走る細い溝である。土師器皿、鍋、山茶椀等が出土。

このS D31の西側の区には不整形な土塙があり、この区より土師器鍋、皿、山茶椀（118・121・128・129・136・138・139）等多数出土している。

S K37 S D33の東8m。不整形な楕円形の土塙。深さ30cm。小皿（132・135）が多数出土。同区からは底部に墨書きされた山茶椀（150）が出土している。

S D35 Cトレンチ西端より120~136mにわたって検出。幅75cm、深さ40cmのV字形を呈する。多数の鍋、山茶椀、皿、青磁片（99・113・140・144・155）が出土。また布目瓦も二点出土している。周辺からも同時代の皿、羽釜、山茶椀（97・122・124・131・137・154）等が出土。

S D40 S D36のすぐ東に並行して走る。幅2.2m、深さ1.4mで、東側は一旦なだらかになり、60cm程度の個所より真すぐ掘りこまれている。層序は暗茶褐色土、黒褐色土となり、暗茶褐色土下には拳大の礫が多数あった。溝内からは多数の土師器鍋、皿、鉢（103・125・141・143・151）等が出土。

S D38・39・41・42・43 S B45の東10~22mの個所、いずれも溝方向N12°Eの並行する溝である。S D38は幅60cm、深さ30cm。S D39は幅2m、深さ60cmで、溝底は平坦で逆台形を呈する。他の溝はS D38と同規模である。いずれも土師器鍋、皿、山茶椀、常滑焼破片が出土している。

(4) そ の 他

S D46 S B50のすぐ西、幅1m、深さ40cmで、断面は逆台形を呈する。この地点で北より西へ大きく曲がるようである。遺物の出土はない。

以上の他にS D40の東側、16m程の部分で不整形な土塙、柱穴が多数見つかっている。しかし、遺構としてまとまるものかどうか不明。この部分の西寄りからは土師器鍋、皿、山茶椀、フイゴの羽口（119・120・147・148・336）が出土し、東寄りからは土師器甕、山皿（92・101・108・109）

等が出土している。

また、遺物を伴出しないで時期不詳の pit や浅い溝も多数見つかっている。

2 遺 物 (PL 8~10)

(1) 奈良時代の土器

一 土 師 器 一

甕A (33~36) 口径17cm以下の小形品で、胴部も球形に近くなるもので、33を除いて表面は縦方向の刷毛目が施される。33は指による調整のみで凹凸がある。内面は横方向の刷毛目のあとヘラケズリされている。

甕B (32・37・38) 外反する口縁部より肩部はあまり張り出さずに長い胴部を有するもの。調整は他の甕と同様である。

甕C (39・40) 口縁部はや、立ちあがり気味に外反し、肩部は大きく張り出して、胴部は球形となるようである。前者A・Bに比べてや、後出のものかもしれない。

カマド (41) 口径23.5cm、器高30cm程度のもの。前面に幅広い庵をつける。把手はや、前の部分に対つけられている。全面縦方向の刷毛目が施される。庵の部分はナデツケをしている。内面には刷毛目は見られない。

鍋A (44) 口径13cm、器高8.5cm程度。小形品のわりに大きな把手がつく。形は甕Aとはほとんどかわらない。

鍋B (42・43) 口径32cm以上の大形品。口縁部の形態は甕に似る。表面縦方向、内面横方向の粗い刷毛目を施し、下半部はヘラケズリしている。

杯 (45~50) 高台がつき暗文が施される杯Bと、そうでない杯Aがある。前者は赤褐色を呈し、内外面ともヘラ研磨される。や、厚手で、ゆるく外方に張り出す口縁部で、杯底部は平坦で、外方に開く高台をもつ。45の表面には僅かに、縦方向の刷毛目がのこる。内面には斜方向の暗文が施され、46の底部近くには螺旋状の暗文が見られる。後者は全体の形態は前者とかわらず、や、薄手である。

皿 (51~56) 口径16cm以上、器高3cm程度の浅い皿である。しかし、51のように杯と区別し難いものがある。浅くて薄手のため、底部は僅かにもちあがるものが多い。口縁部が内湾し、内面とともにナデツケによって平滑に仕上げられている。底部は指による押えのため凹凸がある。

蓋 (57) 中央部が僅かにふくらむ扁平なつまみをもつ破片である。黄褐色を呈する軟質な土器である。

一 須 惠 器 一

鉢 (58) 口縁部のみゆるく外反し、胴部は真すぐのびる。頸部下には平行叩目が施される。うすい青灰色を呈する。

甌 (59) 口縁部が直立し、肩部はあまり張り出さない。口縁部はヨコナデ、胴上半部には格子目状叩目を施す。胴下半部はヘラケズリしている。内面は同心円叩目が全面施される。青灰色を呈する。

盞 (60・61) 60は径11cmの小形品で、中央が僅かにふくらむつまみをもつ。上面にうすい黄灰色の釉がかかる。61は大形品で、天井部はヘラケズリされて平坦となる。

杯 (62~65) 口径14cm、器高3.5cm、高台のつくものは薄手に仕上げられている。底部はヘラケズリのあと、高台をつけている。黄色っぽい青灰色を呈する。胎土は緻密で軟質である。高台のつかない65は厚手で、底部はヘラ切りのままである。細砂を含む黒っぽい青灰色を呈する。

(2) 平安時代中葉の土器

— 土 師 器 —

甌 (66・67) 頸部が直立して、外反する口縁部の端部は上方に立つ。薄手の土器である。全面縱方向の粗い刷毛目が施され、66は胴下半部はヘラケズリ、内面にも横方向の刷毛目が施される。

杯 (68~73・78) 口縁部のみヨコナデされ外反し、底部は指による押えのもので、底部は丸く仕上げられるものと、比較的平坦なものがある。赤褐色、黄褐色を呈し、軟質な土器である。

皿 (74~77) 口径のわりに浅いもので、底部は平坦である。77のように杯と区別しがたいものがある。調整法は杯と同じである。

鉢 (79・80) 真すぐ外方に開く口縁部に平坦な底部をもつ。口縁端部は肥厚する。79は表面粗い縱方向の刷毛目、内面横方向の刷毛目が施される。底部近くはヘラケズリされている。80は全面磨滅が甚しく調整法は不明であるが、一部表面に縱方向の刷毛目が認められる。

小皿B (81・82) ロクロ挽きによって浅い皿をつくり、それに高台を貼付けたもの。底部は1.7mmの厚手である。暗茶褐色を呈し、胎土は緻密である。

— 瓦 器 —

椀 (83) 口径12cm、外反する口縁部のみヨコナデされる。胎土は緻密で白灰色。表面は灰黒色を呈する。内面にはヘラによる磨きが見られる。

— 須 恵 器 —

椀 (84・85) いずれも口縁部の破片で、端部のみ下方に折れる。84は器厚4mmの薄手である85はや、厚手で立ちあがりが急である。

平瓶 (86) 体部の破片で上半部は不明。薄手の精巧なつくりで、胎土も緻密である。底部はヘラケズリして、高台を貼付けている。うすい茶色を呈する。

壺(87) ロクロ挽きされた体部破片である。肩部と胴部の境には稜が走る。肩部には黄灰色の釉が見られる。胴下半部はヘラズリされている。胎土は緻密である。

—施釉陶器—

椀(88~90) 88は高台部分の破片である。糸切りのあと高台をつける。高台より外の部分に灰釉が施される。89は薄手の口縁部破片で、端部は丸くなる。全面黄緑色の灰釉が施されている。90は真すぐ立つ高台をもつ底部破片である。高台は糸切りのあと貼付。うすい黄緑色の緑釉が施される。胎土は灰色で緻密である。緑釉陶器片が他に6点ある。

(3) 平安時代後半の土器

—土師器—

甕(91・92) 前段階の甕に比べて厚手で、胴部は球形に近くなる。口縁部も短かく、端部は内側に折れ曲がる。胴部には粘土の織目がのこり、凹凸がはげしい。92の内側には横方向の刷毛目が施される。茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。

羽釜(93) 口縁部近くの破片で、胴部の形態は不明である。口縁部は真すぐ立ち、端部は平坦となる。表面は縦方向、内面は横方向の粗い刷毛目を施している。刷毛目のあと、幅3.2cm厚1cmの鐸をや、下向きに貼付けている。

杯A(94・95) 口縁のみ1cm程度の幅でヨコナデをし、それより下は指による押えで凹凸のはげしい深い杯である。砂粒を多く含む茶褐色を呈する。

杯B(96・97) 96は口径13.2cm、器高5.8cm、薄手の杯で、底部より口縁部まで真すぐ外方にのび、端部は立ちあがる。高台も薄手で外反する。97は口径16cm、器高6cm。96に比べ厚手で全体の形は山茶椀に近い。96とともにや、茶色がかる白灰色を呈する。

小皿A(100~105) いずれも口径9cm、器高1.5cm程度のもので、杯Aと調整、胎土はほとんどかわらない。

小皿B(98・99・106) 小皿Aに高台をつけたもの。98・99は皿に対して大きな高台をつける。皿の径は口径とかわらない。高台は輪積みされ、端部は外方に折れる。106は高台はや、小さく八の字状に外方に開く。

小皿B'(107~109) 口径は前者とかわらないが、ロクロ挽きで製作されたもので、底部は厚く、糸切り痕がのこる。胎土は緻密で赤茶褐色を呈する。

鉢(111) 厚手の底部破片で、高台はヘラケズリされたあと貼付けている。内面に自然釉が少しかかる。胎土に砂粒を多く含み、黄灰色を呈する。

灰釉椀(110) 口径15.5cm、器高6cmの深い土器で、底部を除いて薄手に仕上げられる。糸切り痕がのこる。高台は高く僅かに内湾する。内側底面を除き、外側上半部黄灰色の釉がかかる。

山皿 (112 ~117) 117を除いて山茶椀を小形化したもので、口径10cm、器高3cm程度。112はヘラによる刻目で輪花をあらわしている。117は厚手の皿である。いずれも糸切りのあと高台をつけている。自然釉がかかり、重ね焼の痕のこるものもある。

(4) 鎌倉時代の土器

鍋A (121~123) 口径18cm、器高8cm程度。口縁端部は内側に折り曲げられる。胴部は扁平で、胴部最大幅は口径とかわらない。輪積の痕がのこり胴上半部は凹凸がある。下半部はヘラケズリされる。胎土に砂粒を含み、肌色がかかった褐色を呈する。

鍋B (118~120) 鍋Aをそのまゝ大きくした形で、口縁部は118では立ちあがって平坦となる。胴上半部は横方向の刷毛目、下半部はヘラケズリされる。

羽釜 (124) 口径20cm、小形の羽釜である。口縁部は真すぐ立つ。鍔は1cm程の幅で、やや下向きにつけられている。鍋A同様胴上部は凹凸があり、下半部はヘラケズリされている。黒褐色を呈し、胎土は緻密である。

鉢 (125・126) いずれも口径18cm前後で、砂粒を多く含み、淡い茶褐色を呈する。125は口縁部は外につき出で、断面三角形となり、胴部は薄手である。126は厚手で口縁端部は内弯する。

小皿 (127~134) 平安時代後半の小皿Aと器形はほとんどかわらないが、やや薄手で、胎土も緻密で平滑に仕上げられている。133・134はロクロ挽きされたもので、厚手である。

皿 (135~140) 口径13cm、器高2cm前後。口縁部が丸く内弯する。胎土・焼成は小皿とかわらない。黄色味をおびた白灰色を呈する。器厚2mmの薄手である。

鉢 (141) 口径27.5cm、器高9.3cm。ロクロ製品で、底部より口縁部へ徐々に薄手となる。底面および底部周辺1cm程ヘラケズリされる。淡い青灰色を呈する。

山茶椀 (142~150) 口径16cm、器高5cm前後のものが多い。146・147のように口径18cm前後のものもある。高台は低く、櫻痕のつくものが数点ある。底部に糸切り痕をのこすもの、ナデツケたものがある。また、143・144の底部内面を指でナデツケしている。一部自然釉がかかるもの、重ね焼の痕のつくものがある。白っぽい灰色を呈し、砂粒を多く含む。150は高台のつかない山茶椀の底部破片である。「一條十六」の墨書きされている。

山皿 (151~156) いずれもロクロ製品で、糸切底である。山茶椀を小形にしたものが多い。胎土・焼成・色調は山茶椀と同じ。

以上の他に青磁片が30点、白磁片も4点出土している。S D35およびS D40の周辺より多数出土している。

(5) そ の 他

布目瓦 (339~341) 四点出土している。そのうち二点はS D35より出土。丸瓦、平瓦一点づつ

である。丸瓦の内面には布目痕が見られる。伴出の土器は鎌倉時代のものが多い。

フイゴ羽口（336） 径9.4cm、現長11cm。先端が細くなる。

砥石（310～312・316） いずれも一部欠損したものである。310は中央部がよく研ぎ使われて断面は楔形を呈している。311・312は方形の断面で、各面に研ぎ痕がある。316はよく使用され僅か1cm足らずのものである。それぞれ310は中粒砂岩、311はチャート、312は半花崗岩、316は石英斑岩製である。

土鍤（318～321・323・324・332・333・335） 合計15点出土している。径1cmの細いものと、3cm近くの太いものがある。黒褐色を呈する堅緻なものや淡褐色を呈する軟質なものがある。

VI Dトレンチの調査

斎王の森の東で、東西に走る134mのトレンチである。Aトレンチより178m、Bトレンチより79m離れ、B・Cトレンチに並行する。地表面はほぼ平坦で、両端の比高は僅か50cm程度で東側が低い。西側では耕作土が浅く15cm程度で地山となる。東側はやや深く40~50cmで地山となる。耕作土下には他のトレンチとは異なりやや粘質の暗茶褐色土、黒褐色土がある。地山も他のトレンチに比べ固い茶色をおびた黄褐色土である。

Cトレンチ同様多数の柱穴、土塙、溝等の遺構が見つかっている。しかし、幅3mのトレンチのため、それらの遺構がどのような規模をもつものかは不明である。

1 遺 構 (PL 6)

(1) 平安時代の遺構

S B51 Dトレンチ西端部。掘立柱建物址の北東隅部分を検出。柱穴は径45cm、深さ40cm。柱間は2.4m。柱穴の一つから山茶椀、皿(222・284)等が出土。同区の南西隅のpitからは奈良時代の甕・杯(158・162)が出土している。

S K53 西端より17m東。南部分を検出。幅2mで長い楕円形を呈すると思われる。深さ25cm。底は平坦である。土師器甕、皿、灰釉陶器片が出土している。

S K57 S K53の東30m。発掘当初溝址とも考えたが、不整形な楕円形を呈する土塙であった。S B60の南西隅にあたる。灰釉、緑釉陶器片をはじめ土師器甕、杯、皿、鉢(167・168・171・172・176・177・184~186・193~195・199~203・208~211)等多数がまとまって出土している。

S B60 S K57に重なった状態で発見。桁行5間の側柱列。桁行21.3m、柱間4.3m。桁方向E16°W。S B51もほぼ同じ。柱穴は径70cmの方形に近い形で、深さ40cm。南西隅の柱穴からは土師器杯、皿(232・240)が、他の柱穴からも土師器甕、杯の破片が出土している。

S K58 S B60のすぐ東。径2.5m、深さ25cm。西側部分を検出。土師器甕、杯、須恵器杯、蓋(178・179・207)が出土。上層および周辺からも多数の土器(183・198・211・220~225・230)が出土している。

S K59・61・62 SK58の東7m。S K59は一辺1.5mの方形、深さ17cm。S K61は径1.5×1.35m、深さ10cm、S K62は径2×1.8mの不整形の楕円形で深さ20cm。いずれも土師器杯、皿、灰釉陶器片(192・216・227・247)等が出土している。多くは平安時代に属するものであるが、S K62には山茶椀(280)も入っている。このS K62の西側の径40cm、深さ33cmのpitからは土師

器甕、杯片、綠釉陶器片とともに小さな白黒の玉石が多数出土している。pitの底には礫が5個敷かれた状態で見つかっている。

S E64・65・66 S K61の東8m。S E64は径80cmの円形。S E65は径1.65mの方形。S E66も径2.5mで方形と思われる。S E65は4m程掘り下げたが底まで掘りきれなかった。土師器鍋、皿、山茶椀、常滑焼破片（238・242・243・270）が出土している。平安時代末に掘られたものと思われる。

以上の他に平安時代と思われる多数の柱穴がある。特に東部分の柱穴およびその周辺からは平安時代後半の土師器杯、皿、山皿等が出土している。しかし、遺構としてのまとまりは指摘し得るものはない。

(2) 鎌倉時代の遺構

S D55・56 Dトレンチ西端より43m。南北に走る二条の溝である。土層断面図より東側のS D56が古く、S D55に切られている様子がわかる。S D55の幅1m、深さ85cm。S D56は幅1.3m、深さ90cm。ともに溝底は平坦である。埋土はS D56は黒褐色粘質土。S D55は黄褐色土混入の黒色土および暗褐色土である。多数の土師器鍋、皿、白磁片（255・256・263～266・279）等が出土。これらに混ざって平安時代の土師器甕、杯、灰釉陶器片、綠釉片（204・213・221・234・235）が出土。また、S D56の最下層からは鉢（278）が出土している。

S D67 S E66の東4m。幅1.7m、深さ34cmの南北に走る溝。土師器鍋、皿（257～259・269）が出土している。

(3) そ の 他

S D52 西端より12m。東側の肩部分のみ検出。丁度、小さな農道の下になる。遺物の出土はない。

S D54 西端より24～48m。なだらかに北に向って深くなる。トレンチの北側部分で、すぐ北の森との境界となる。遺物には土師器甕、皿が少量出土している。

S D69 東端より38m。東側部分のみ検出。畠の境界部分である。山茶椀、常滑焼片、灯明皿片が出土している。

以上の他に不整形な溝S D72、土塙S K70等がある。出土する遺物は土師器甕、皿等 平安時代に属するものと、山茶椀等鎌倉時代に属するものが伴出している。また東端部近くの数条の細い溝はいずれも耕作土下より切りこんでおり、新しい時代のものである。

2 遺物 (PL 11~13)

(1) 奈良時代の土器

— 土師器 —

甕A (158~160) 159は口径18cm、器高16cm。表面は縦方向の刷毛目、内面横方向のヘラケズリされる。158・160は口径10cm、6cmと更に小形の甕である。

杯A (161・162) 161は口径16cm、器高3.4cm。口縁部ヨコナデ、底部は指による押えで凹凸がある。口縁端部は浅い沈線が見られる。赤褐色を呈する。162は口径19cm、器高3.2cm。厚手のつくりで黄褐色を呈する。磨減が甚しいが、底部はヘラケズリされているようである。

皿 (163) 口径16cm、器高2.6cm、底部は平坦で、口縁端部は僅かに立つ。胎土は緻密で、磨減が甚しく、調整法は不明。

— 須恵器 —

甕 (164) ゆるく外反する口縁部破片で、口縁端部は僅かに折り返された状態となる。黄灰色を呈し、胎土は緻密で、軟質である。

杯 (165・166) いずれも高台付の杯部破片である。口縁部は薄手のようである。外方に聞く高台はヘラケズリのあとつけられている。

(2) 平安時代中葉の土器

— 土師器 —

甕A (168~170) 口縁部はあまり外反せず、肩部は比較的張り出し、胴部は球形となる。口縁部はヨコナデ、肩部には粗い縦方向の刷毛目が施される。下半部は煤が付着するが、剥落が甚しい。169の内面胴上半部にも粗い横方向の刷毛目が施される。169は5~6段の輪積みの痕跡が見られる。底部は円板を貼付けている。暗茶褐色を呈する。

甕B (167) Aに比べ肩の張りが少なく、胴部も長くなる。口縁端部は内側に曲げられる。胴下半部まで縦方向の粗い刷毛目が全面施され、その後、底部周辺をヘラケズリしてしている。器厚5mmの厚手で、黄茶褐色を呈する。

鉢 (171~172) 底部よりゆるやかに内寄しながら立ちあがり、口縁部は外反する。口縁端部は甕同様内側に曲がる。口縁部はヨコナデ、胴上半部は縦方向の粗い刷毛目。その境は低い稜となる。胴下半部は指による押えで凹凸がはげしい。淡い黄褐色を呈し、胎土は緻密で軟質である。

杯 (174~186) 口径13cmから18cmまで種々ある。いずれも口縁部および内面をナデによって平滑に仕上げ、底部は押えのみで凹凸となるものである。赤味をおびた黄褐色を呈するものが多い。胎土は緻密である。186はロクロ製品で底部には糸切り痕がのこる。口径15.5cm、器高3.7cm。胎土は他の杯とかわらない。

蓋（187） 口縁部の小破片である。淡い褐色を呈する。

高杯（188~191） 器高20cm近くで、杯部、脚裾部ともに器高のわりに小さい。杯部は浅い皿状で、手捏で表面は押えで凹凸があり、内面には刷毛目状の痕が見られる。中心部には径12mmの孔があき、脚部へつづく。脚部は径6~8cmでヘラケズリによって8~10面に面取りされたものが多い。円柱のまゝのものもある。脚裾部はロクロ製作された浅い杯を逆に貼付けている。裾部まで孔がつづくものと、そうでないものがある。脚部の接合は両者に小さな刺突をつけたあと接合しているものがある。砂粒を多く含む胎土で、淡い褐色を呈するものが多い。

— 瓦 器 —

椀（192） 口径13cm、器高4cm程度。器厚3mmの薄手で、高台は真すぐに立つ。全面黒灰色を呈し、ヘラによって研磨されている。

— 須 惠 器 —

椀（194~196） 194は高い高台のつく底部破片で、ヘラケズリしたあと高台をつけている。淡い青灰色を呈する。195は口径16cm、器高5cm。丁寧にロクロ挽きされた薄手の土器である。196は口径14.8cm、器高5cm。195に比べて厚手で、高台も小さい。底部には糸切り痕のがこる。焼成は悪く茶褐色を呈し、砂粒を含む。

蓋（197） 中央部が少しふくらむつまみをもち、白っぽい黄灰色を呈する。胎土は緻密。

— 灰 色 陶 器 —

平瓶（193） 口縁部、把手、高台を欠損する体部破片である。肩部の最大径22.6cmを測る大形品である。肩部分には淡緑色の灰釉があつく施され、下半部はヘラケズリされている。器厚1cmの厚手で、胎土は白っぽい灰色で緻密である。

段皿（198） 口径18cm。口縁部に幅2cm程度の縁で段状となり、外側も段となる。器厚5mm。やや黄色っぽい灰色を呈し、内面には淡い黄緑色の灰釉が施される。

皿（200~205） 底部より口縁部まで真すぐ外方に挽き出されるものと、口縁部のみ僅かに立つものがある。201は口径14cm、器高3cm。202は口径13cm、器高2.7cm。高台は低く、いずれもヘラケズリしたあとつづいている。白っぽい灰色を呈し、胎土は緻密である。淡い黄緑色の灰釉が施される。重ね焼の痕跡のあるものもある。

椀（206~210） 口径13cm、器高4cm程度のものと、口径16cm、器高5cm程度のものとがある。皿同様薄手の丁寧なつくりで、高台もやや大きく、高くなる。底部はヘラケズリされたあと高台をつけている。胎土は白灰色で緻密である。淡い黄緑色の灰釉が施されている。

199も椀の一種と思われる。真すぐ外方にのびる口縁部で、底部へ曲がる個所で浅い凹線がはしる。灰色を呈する堅緻な土器である。

— 緑 色 陶 器 —

椀（211） 底部の小破片である。器厚5mm。高台は真すぐ立つ。うすい黄緑を呈する。底内

面には円を描く浅い沈線が見られる。

この他に綠釉陶器はDトレンチから総数39点が出土している。いずれも小破片で図示出来るものではない。胎土が白っぽく軟質で、黄緑色の釉薬が剥落しやすいものと、灰色で濃緑色の釉薬で堅緻なものがある。また、両面に沈線によって各種文様が描かれるものがある。

(3) 平安時代後半の土器

甕 (212・213) 短かい口縁部で、先端は丸く内側に曲がる。胴部は下半部を欠失するが、球形を呈するようである。器厚5mm以上の厚手で、肌色がかった茶褐色を呈する。表面は磨滅が甚しく、凹凸がある。

杯A (227~237) 口径15cm前後で、器高4cm以下のもので、器厚5mm程度の厚手である。口縁1cm幅程と内面をナデツケして、底部は指による押えで凹凸がはげしい。細砂を多く含み、軟質で磨滅が甚しいものが多い。

杯B (214~216) いずれもロクロ製品で、高台がつく。ヘラケズリしたあと高台を貼付けている。214は口径15cm、器高5.1cm。高台は1.6cmと高い。白灰色を呈し、砂粒を含む。216は口径16cm、器高5cm。前者に比べ高台は低く小さい。山茶椀に全体の形は似る。白っぽい褐色。

小皿A (238~247) いずれも口径10cm以下、器高2cm以下で、調整法・胎土・焼成は杯Aとはとんどかわらない。

小皿B (221~226) 小皿Aに高台を貼付けたもの。221~223は径4cm以上、高さ3cm以上の比較的大きな筒状で、縦方向の面取り状の押え痕が見られる。224~225はハの字状に開く高台で、内側は笠状工具でえぐり取られた状態となる。224の皿内面には布目の痕が見られる。

小皿B' (217~220) ロクロ製品で大きさはBとかわらない。219・220は糸切底。

鉢 (173・248) 口径40cm以上。器厚1cm以上の厚手で、口縁端部は丸く肥厚する。全面横方向のナデツケで調整しているが、凹凸がはげしい。173の内面には一部うすい刷毛目が施されている。砂粒を多く含み黄茶褐色を呈する。

山皿 (249~254) 山茶椀を小形化したものが多い。いずれもロクロ製品である。250は笠剣目による輪花があらわされている。251は口縁部2cm幅の縁をもつ段皿となる。いずれもうすい青灰色を呈し、釉が口縁部にかかるものもある。

(4) 鎌倉時代の土器

鍋A (260・261) 口径18.5cm。口縁端部は内側に折り曲げられる。口縁部はヨコナデ、肩部以下は押えによって凹凸があり、煤が全面につく。胎土は白っぽい灰色で軟質である。

鍋B (255~258) 頸部が長くのびる大形のものと、浅い鉢形を呈するものがある。いずれも口縁端部は内側に折りまげられ、ナデツケられている。255は頸部に細かい刷毛目がのこり、肩

部以下はや、粗い横方向の刷毛目が施される。256は口縁部のみヨコナデ、肩部以下は斜方向の粗い刷毛目が施され、底部はヘラケズリしている。

鍋C (259) 口径24cm、口縁部は立ちあがり、内側は段状にたって、真すぐ底部へつづく鉢形に近いものである。全面煤が付着している。胎土は白灰色で、細砂を含む。内面は磨滅している。

皿 (262~266) 口径12cm、器高2.5cm、器厚3mmの薄手。口縁部は内寄して、底部は平坦である。胎土は緻密で、黄茶褐色を呈する。

小皿A (267~270) 口径8cm、器高1cm以下。薄手のため口縁部は平坦でなく、歪んだものが多い。胎土、調整、色調等皿と同じである。

小皿B (271~277) ロクロ製品で底部には糸切痕がのこる。いずれも口縁端部は丸く仕上げられ、底部は厚手である。黄茶褐色を呈する。

鉢 (278・279) 278は口径27.6cm、器高10cm。ロクロ製品で底部はヘラ切りである。口縁部はや、外反気味に真すぐのびる。口縁端部はつまみあげられたようになる。胎土は細砂を少量含み、灰色を呈する。279は口径30cm、器高12cm。ロクロ製品で、高台はヘラケズリされたあと貼付けている。口縁端部は丸く、上面は浅い凹線状となる。や、黄っぽい青灰色を呈する。

山茶椀 (280~288) 口径16cm前後、器高6cm以下のものが多い。内寄しながら立つ口縁部は先端部のみ外反する。糸切りのあと高台をつけている。286は糸切りのままで高台はつかない。高台には輪筋のつくものもある。白っぽい青灰色を呈するものが多い。

山皿 (289~291) 山茶椀を小形にしたものである。高台のつかないものもある。口縁部内面に自然釉のかかるものがある。胎土・調整・色調は山茶椀と同じである。

小形鉢 (292・293) 292は口径7cm、器高4.7cm。底部より口縁部へは内寄して、端部のみ僅かに立つ。底部は糸切りのままで、高台をつけている。内面には黄緑色の釉が吹きつけられたようにつく。表面は白っぽい青灰色を呈する。293は口径11cm、器高6.6cm、口縁部は真すぐ外方に開く。底部は糸切底。細砂を含み、292同様白っぽい青灰色を呈する。

他に青磁・白磁の破片が14点出土している。青磁は濃緑色の釉が厚くかかり、蓮弁をあらわすものもある。

(5) その他の

砥石 (313・315) 313は井戸SE65より出土したもので幅5×3cm、現長6.6cm、両面に砥ぎ痕がある。片麻岩製。315は両面よく使用したもので石英斑岩製。

土鍤 (317・322・325~331・334) 合計33点出土。325はSD56、327はSK57、329・334はSK58出土。

玉石 (PL31) SD65の西側の径40cmの柱穴内より出土。径1cm程度の丸く磨りへった小石で、他の個所からは全く出土していない。白石は1380個、黒石は307個ある。

VII Eトレンチの調査

斎王の森のすぐ東で、民家との間僅か31mのトレンチである。Aトレンチの東36mで、Bトレンチと65m離れて並行する。ゆるやかに南に向って下る斜面の肩部分である。このため地山まで深く、地表より85cmを測る。層序は耕作土下に粘質黒色土が少量混在する粘質土があり、黄茶褐色土、黒色土、地山となる。

1 遺構 (PL 6)

(1) 奈良時代の遺構

SD79 東端より4~9mの個所。幅1m、長さ5.6m、深さ55cm。東西に走る。黒色土が充満している。溝内および上部より土師器甕、杯、カマド、須恵器円面硯(294~301・303・305・306)等多数出土している。

(2) 平安時代の遺構

SD76 西端より7m、南北に走る幅1.9m、深さ49cmの溝。東側に比べ西側はゆるやかな傾斜である。土師器杯片が数点出土している。

SD77 すぐ東に並行して走る溝。幅1.4m、深さ45cm。底面は平坦で断面は逆台形を呈する層序は暗茶褐色土、黒色土、黄褐色土を混入する黒色土である。土師器杯片とともに縁釉陶器片(304)が出土している。

(3) 鎌倉時代の遺構

SD78 SD77の東5m。幅2.5m、深さ40cm。底面は平坦で拳大の碟が敷かれる。埋土は少量の黄褐色土を含む黒色で、碟の上部より山茶椀、鉢(307・308)等が出土している。

2 遺物 (PL 13・14)

(1) 奈良時代の土器

—土 師 器—

甕A (296) 口径16.5cm、器高14.1cm。外反する口縁部中央は肥厚する。口縁をヨコナデ、肩部以下胴下半部まで細かい縦方向の刷毛目が施され、底部は横方向にヘラケズリされる。胴部は

輪積のため凹凸がある。内面もヘラケズリ、赤褐色を呈する。

甕B (294・295) 294は口径27.6cm、器高42の胴長の甕である。全面縦方向の、底部のみ斜方向の刷毛目が施される。内面は上半部を横方向の刷毛目、下半部を縦方向のヘラケズリがされている。全面煤が付着しており、暗茶褐色を呈する。295はヘラケズリが内外とも胴上半部まで施される。細砂を含み、暗茶褐色を呈する。

カマド (306) 口径37cm、器高51cm、焚口は幅60cm、高さ32cm。把手はや、前に対つけられている。口縁部、庵、裾部分は刷毛目のあとナデ、他の部分は全面縦方向の粗い刷毛目、内面も裾部分を除いて横方向の刷毛目が施される。うすい茶褐色を呈する。

皿 (297・298) 口径20cm、器高3cm前後、やや外に開き気味の口縁端部は丸くなる。底部は平坦である。297の底部はヘラケズリされているようである。298は磨滅して不明。赤褐色を呈し、胎土は緻密である。

杯 (299) 口径14.5cm、器高3.6cm。口縁部は内湾してヨコナデ。底部は指による押えで凹凸がある。うすい黄茶褐色を呈する。

高杯 (300) 口径24cmの杯部分の破片である。端部のみ丸く僅かに立つ。器厚7mmの厚手。黄茶褐色を呈し、緻密な胎土である。

—須恵器—

円面鏡 (301) 口径13.5cm。陸の部分は平端で、海の部分は7mm程斜めに深くなる。ヘラケズリしている。口縁部は3mm程の薄手。脚部は透しではなく、範描沈線によって透しをあらわしている。やや青味がかった灰色で、胎土は緻密である。

甕 (305) 口径44cm、器高74cm。口縁部はゆるく外反して、端部はつまみあげられたようになり、段状となる。胴部は肩部で大きく張り出し、底部へ徐々に小さくなる。器高のわりに薄手である。表面は格子目状の叩目を全面に施し、胴上半部はその後横方向にヘラケズリしている。内面は胴上半部は同心円、下半部は平行の叩目が施される。うすい紫色をおびた灰色を呈し、胎土は緻密で、焼成は非常に良い。

(2) 平安時代の土器

302は口径17cmの土師器杯。303は須恵器杯の高台部分の破片で、内面には自然釉がかかる。304は綠釉陶器片でS D77出土。底面はヘラケズリしており、胎土は白っぽい軟質なものである。他にもう一点S D77と78の間で内側に段のある綠釉陶器の破片がある。

(3) 鎌倉時代の土器・その他

307・308はそれぞれ常滑焼の摺鉢、渥美産の鉢である。

布目瓦 (342) トレンチ東端近くで出土。平瓦片で、細かい繩目がつく。

VIII プロトン磁力計による磁気探査結果

斎王宮跡の発掘調査に先立ち、プロトン磁力計による磁気探査によって、地下の遺構の存在を確認することになった。この調査は、大阪府教育委員会の協力を得て昭和40年12月末に行なった。その結果を送付して頂いたのでそれをもとに図表を作成してここに載せることにした。（PL15・16）

当初、斎王宮跡の調査地点の南300mの個所には近鉄宇治山田線および高圧線が並行して走っており、更に道路にそって各所に電灯線があり、これらが磁気探査に相当の影響を与えるものと考えられた。そこで、まず古里遺跡のB・C地区の中間地点で、C地区SD50の延長部分に於いて測定することにした。測定点は11点で、中央部分2m幅においては測定値は低く、その両端部では高い数値を示した。平均最低測定値は46005γで、両端の平均測定値は46030～46040γを測り高底差は3.0±0.5mという結果を得た。この結果はC地区発掘調査によるSD50の幅3～4m、深さ2.4～2.9mという値にはほぼ一致していた。

これにひきつづき、斎王宮跡Aトレントの西側に沿ってC₁～C₁₉点を、更にその畠の中央部および北側で畦に並行してA₁～A₂₆、B₁～B₁₆点で測定することになった。A線についてみると、最大値はA₁₃の46048.6γで、最低値はA₁₆の46020.3γである。測定値が周辺より一段低くなる個所はA₃・A₁₂ A₁₇・A₂₁・A₂₆の点である。A₃とA₁₇はすぐ近くで、この点を結ぶ溝の存在が予想される。一方B線ではB₂で46016.0γで他の点では46025γ前後であり、地下の遺構の存在はあまり予想できないところである。C線では殆んど変化は見られずC₁₇のみ46037.8γと高いが、他はいずれも46020～46030γであり遺構はないようであった。以上のA～C線の測定値と今回の発掘結果をみると、この地点はあまり遺構の検出できなかった部分で、僅かにB₁₀の北に幅2m、深さ40cmのSD4が走っている。このSD4を延長するとA₃、A₁₇の点にいきそうであり、測定値の低い部分に合致する。

つづいて、開墾前に浅い堀があったといわれる部分にD線を設けた。その結果、最低値は農道下のD₁₂点の45957.8γで、D₁₆点より北側ではいずれも46000γ以上である。D₄～D₁₆点までは45980γ以下である。しかし、この付近を更に数点測定すると、45934.9γより46019γまで測定値にばらつきがあった。発掘した結果、農道にそって幅3.2m、深さ2mの深い掘SD5があり、これが農道にそって東進してD₆～D₁₃の間にづくものと考えられる。しかし、この地点を中心開墾時には相当掘り返したと当時の担当者が話しており、この付近の地下遺構は既に破壊されているものかもしれない。

次にCトレントの東側部分を中心に測定をはじめたが、いい結果を得られなかった。それはトレントの走る畠は鉄骨資材置場になっていたり、町道のそばで車の往来がはげしいことによるも

のであった。このためやや北に離れた個所にE、F線を設けた。E線では西端の民家近くで450901.8γと一番低く、E₉の46003γまで徐々に高くなる。E₁₀で45975γと一旦低くなり、E₁₁で再び高くなる。これより東は変化は少ない。F線では45990.9γより46016.7γまでの小規模な変化が認められるのみである。

最近、各地に於いてプロトン磁力計による磁気探査が行なわれているようである。三重県においても今後もこの探査は機会あるごとに調査機関の協力を得て実施したいと考えている。しかし、磁気探査の結果はあまり公開されていないようであり、今回の調査結果についても専門外のことでもあり、報告はただ測定値の紹介にとどまってしまった。

今回の斎王宮跡における磁気探査の結果は決して良好であったといえないかも知れない。それは数万m²におよぶ発掘対象地域において数十点の測定点によって遺構を確認することは無理なのかもしれない。その上、今回の測定点と発掘地点が一部分離れた個所によったため、発掘結果と直接てらしあわせることが出来なかった点も考えなくてはならない。

そこで、今後磁気探査を行なう場合、特に当遺跡のようにトレンチ調査の場合は、他の物理的な影響（電車、車、架線等）を無視して、細かく測定点を規則的に設けて行ない、その結果と発掘結果をてらしあわせることが必要だと考えられる。その測定結果に他の物理的な影響を参考として記載することによって、その影響力も知ることが出来るものと思われる。

IX 結語

斎王宮跡の初年度調査の範囲確認という目的は充分に達せられたとはいえない。トレント延長700m、2566m²についての調査であったが、明らかな築垣、濠といった遺構は発見出来なかった。主要な建物と思われる柱穴についても明らかにし得ず、これは多分に幅2~4mという幅のせまいトレント調査による結果からやむを得ないものかもしれない。ただ、Aトレントの南端部およびCトレントの中央部、更にDトレントからは比較的多数の縁釉陶器片、灰釉陶器片が出土し、遺構も多く見つかっている。それらの中には平安時代に属すると思われるものも見られる。これらが斎王宮跡そのものかどうか速断しかねるが、何らかの関連を有する可能性の強い個所といえようである。以下、各トレントについて若干の所見を述べて結語としたい。

○ Aトレント

他のトレントに比べ遺構、遺物は少ない。各種の溝址が見つかっているが、いずれもその性格は不明である。ただ、溝底が平坦な断面逆台形を呈するものは同方向もしくは直交するようである。南端部の掘立柱建物址SB10は、風字硯の出土等より平安時代としたが明瞭ではない。中央北寄りで見つかった耕作土下の焼土面も気になる。幅広く深い溝SD5はいい伝えられている有染堀かどうか、また古里遺跡B・C地区で見つかっている大溝に続くものかということは、現在ではまだ判断しようがない。

○ Bトレント

西端部のSD16は縁釉陶器片が出土しており、平安時代に属するものであるが、他のものの多くは奈良時代に属する土器片が少量出土しているのみである。Aトレントの北側部分同様に直接斎王宮跡に関連しないものかもしれない。

○ Cトレント

中央部分でかなりの縁釉陶器片が出土しており、土塹、掘立柱建物址の可能性のある部分もある。東側部分で奈良時代、平安時代の竪穴住居址がそれぞれ一戸づつ見つかっている。この部分が一般的に考えて斎王宮跡の内部だとは考え難い。ただ、SK37付近で出土した「一条十六」と墨書きされた山茶椀片が気になる。

○ Dトレント

最も多くの平安時代の遺物を出土している。特にSB50、SK56付近からは縁釉・灰釉陶器片とともに多数の土師器、須恵器片が出土している。SB50は比較的大きな掘り方の柱穴の側柱列である。このトレントからは他にも多数の柱穴群が見つかっているが、SB60のように大きくななく、幅3mという狭いトレントのためその規模は全くわからない。また、鎌倉時代の溝址SD56は比較的しっかりした溝址で多数の遺物が出土している。

○ E トレンチ

僅か31mの短かいトレンチであり、遺構としては幅広い東西に走る溝がある。縁釉片を出土したSD76と山茶楓片が出土したSD78が並行して走り、奈良時代の不整形なSD79同様その性格は不明である。

次に出土した土器の年代について述べてみたい。最近、県下に於いて奈良時代、平安時代の土器の出土は決して少なくない。金剛坂遺跡、古里遺跡、カリコ遺跡、高向遺跡等がある。しかし、その編年関係はまだ確固たるものにはなっていない。それは土器の出土状況が良好でないことにもよっている。当遺跡の出土もそうであり、僅かにSB45、SK57、SD79等があるのみである。ここでは当遺跡の土師器杯、皿、楓等についてみながら他遺跡と比較してみたい。これらの土器の表面の調整には口縁部をヨコナデし底部をヘラケズリするもの、口縁部までヘラケズリするもの、ヘラ磨きをするもの、口縁部をヨコナデし底部は指による押えで凹凸のあるもの等がある。この手法は平城宮跡に於いて分類されている手法のそれぞれb・c・d・e手法に相当する。ETS D79出土の杯はbとe手法があり、CTS B45ではb手法2点、e手法1点がある。DTS K57では全てe手法である。今回の調査に於いてはe手法が最も多く、次にb手法、c・d手法は数点にすぎない。

一方、古里遺跡C地区SK4ではb・d手法があり、金剛坂遺跡SB1・SK15では殆んどがb手法である。カリコ遺跡では全てe手法のものである。平城宮跡で奈良時代末に盛行するとされるc手法は高向遺跡の報文に指摘されているように当地域では少ないようである。古里遺跡、金剛坂遺跡は7世紀末から8世紀初頭に比定されている。金剛坂遺跡ではd手法が見られないことよりやや後出のものかもしれない。

また、平安時代初期に盛行するe手法はカリコ遺跡、高向遺跡、斎王宮跡SK57に多く見られる。この三遺跡の土師器表形土器をみると、カリコ遺跡のものは古里遺跡、金剛坂遺跡のものに殆どかわらないが、他の二遺跡のものは粗い刷毛目が施され、口縁端部が立ちあがり、胴部もやや短くなる。カリコ遺跡は高向遺跡、斎王宮跡SK57より古いものと思われる。SK57については伴出の灰釉陶器より黒錠14号・90号窯式、10世紀後半より11世紀前半に求められると考えている。高向遺跡もこれに近い時期ではなかろうか。これは縁釉陶器の多くが10~11世紀に属するとされる見解にも一致する。ATS B10の上層より出土した風字硯も同時期と思われる。ただ斎王宮跡と高向遺跡の杯をみると、斎王宮跡では赤褐色を呈して厚手であるに対し、高向遺跡では白っぽい茶褐色で薄手であるという違いがある。その先後関係は斎王宮跡の方が古い気がするが速断出来ない。

斎王宮跡で平安時代後半とした土器群は遺構より繰って出土したものではない。土師器杯を見ると、厚手で砂粒を多く含むe手法の土器であり、楓も大範遺跡で出土している球形に近いもの

であり、平安時代末に北定し得るものと思われ、山茶椀では大アラコ形式に相当するものであろう。ただ、先の記述において鎌倉時代とした山茶椀の一部にこの時期に遡るもののが含まれているかもしれない。

平安時代の土器は前半期にはカリコ遺跡が、中葉には斎王宮跡SK57や高向遺跡の多くが、そして、後半には斎王宮跡の平安時代後半とした土器群が存在するものと思われる。

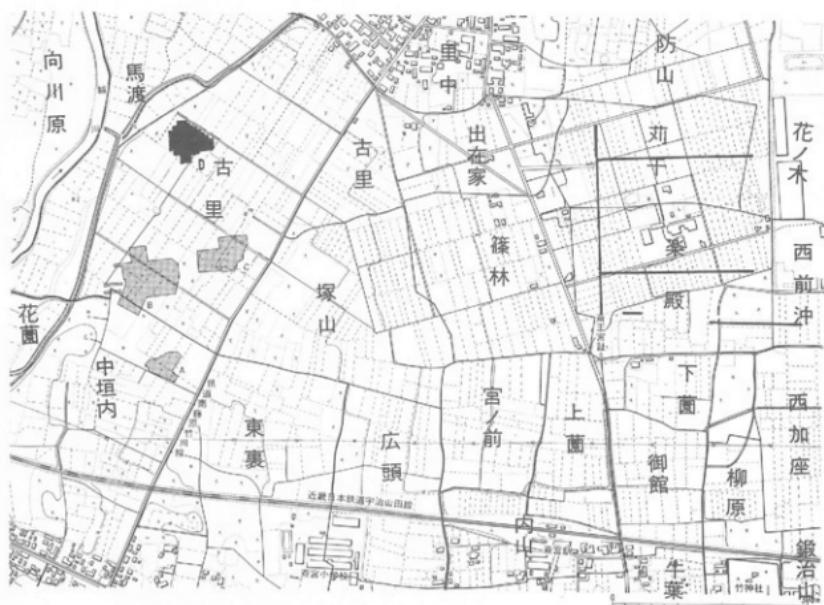
このようにしてみると、奈良時代後半と考えられる土器群の存在が問題となってくる。当地域ではc手法が少ないことは指摘されているが、おそらく奈良時代後半にはb手法がのこっているものと思われる。この時期にはBTS D22やETS D79等がくるのではないかと考えている。良好な奈良時代後半の遺構の検出をまちたい。更に今後は今回のように杯形土器のみでなく、個々の器形の変化もくわしくしらべていく必要があろう。

来年度は今回の調査地区の南および西側を中心に調査したいと考えている。この地点はいい伝えられている斎王宮跡の中心部分であり、何らかの関連した遺構の検出につとめたい。そして、斎王宮跡の範囲、規模を確認するとともにその保存策もあわせて考えていきたい。

参考文献

- 「平城宮跡発掘調査報告II」奈良国立文化財研究所 1962
- 「平城宮跡発掘調査報告IV」奈良国立文化財研究所 1965
- 「明和町史」明和町 1972
- 田中琢「古代中世における手工業の発達一畿内」日本の考古学Ⅳ
- 芳賀陽「渥美半島基部における窯業製品の変遷」渥美半島における古代中世の窯業遺跡 田原町教育委員会 1971
- 橋崎彰一「三彩綠釉灰陶」陶磁大系5 1973
- 伊藤久嗣・吉水康夫「南勢バイパス埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会 1973
- 山沢義貞他「カリコ古墳・カリコ遺跡発掘調査報告」玉城町教育委員会 1972
- 山沢義貞「古里遺跡発掘調査報告—C地区—」三重県教育委員会 1973
- 山沢義貞他「金剛坂遺跡発掘調査報告」明和町教育委員会 1971

図版



斎王宮跡周辺小字名図

例 計 算



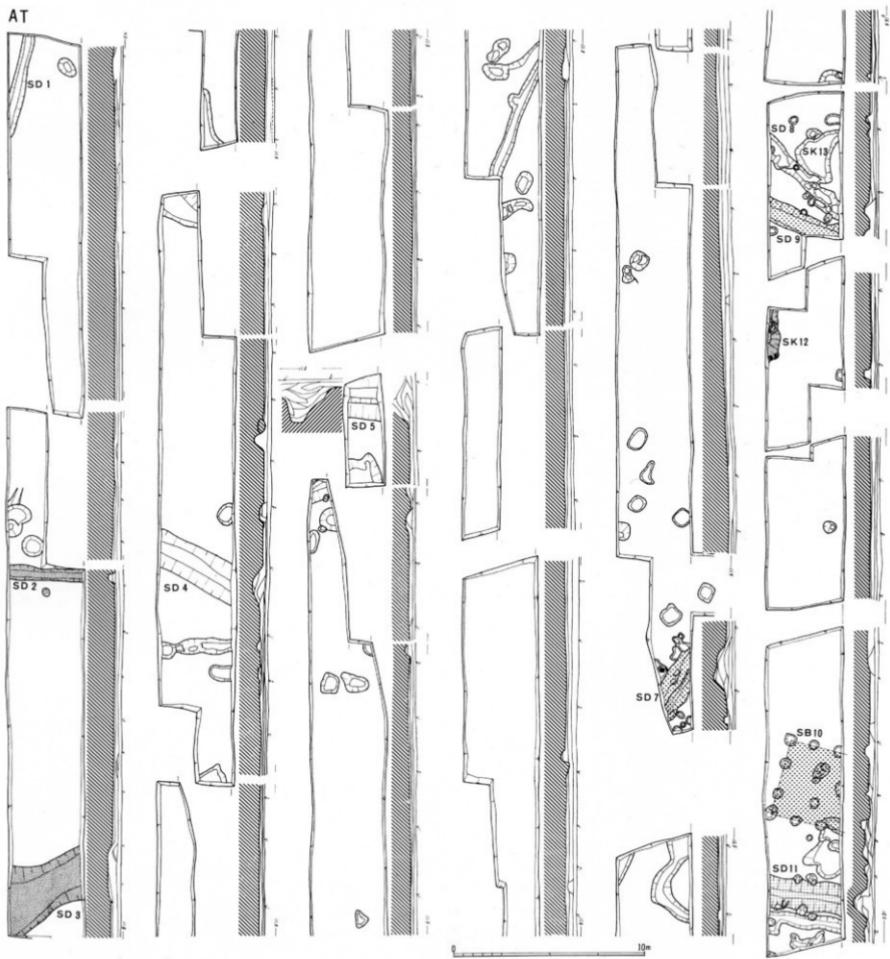
1. 佐八遺跡
2. 金剛坂遺跡
3. 神前山古墳群
4. 古里遺跡群
5. 坂本古墳群
6. 摩山古墳群
7. 天皇山古墳群
8. 河田古墳群
9. 上村池古墳群
10. 斎宮池古墳群
11. 上田辺古墳群
12. 開久田古墳群
13. ボウズ山古墳群
14. 原古窯址群
15. 明星古墳群
16. 中東山遺跡
17. 大阪遺跡
18. 向高遺跡
19. 高倉山古墳
20. 小町経塚
21. 度会離宮院
22. 鳥神社
23. 陸子内親王墓
24. 竹神社

斎王宮跡位置図 (1 : 50000 松版・伊勢 国土地理院)



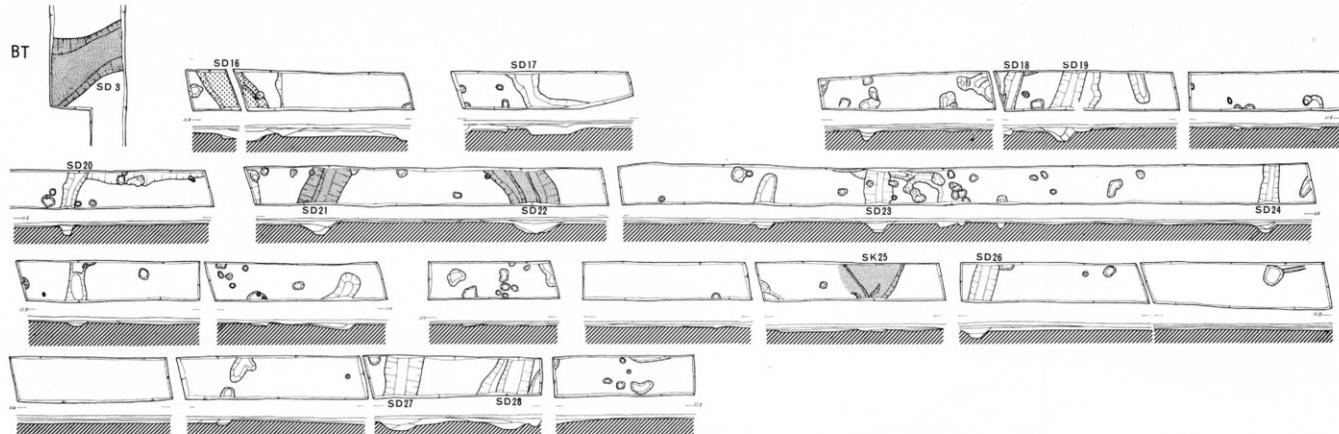
斎王宮跡地形図 (I : 3000)

AT

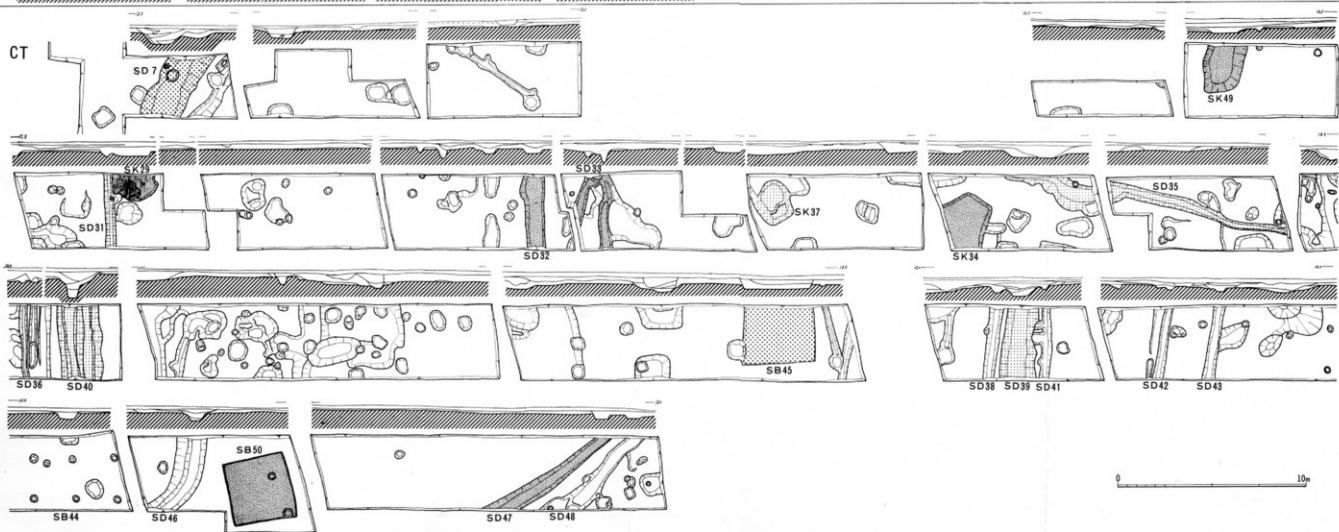


A.T. 平面図 (1:200)

BT



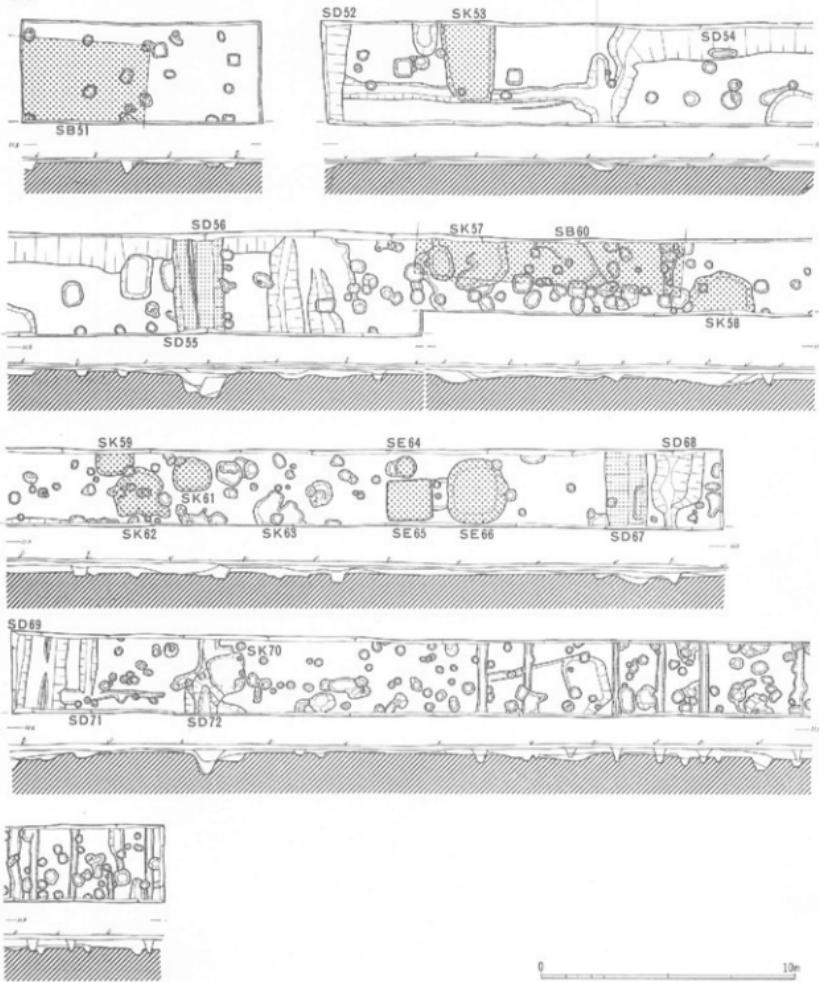
CT



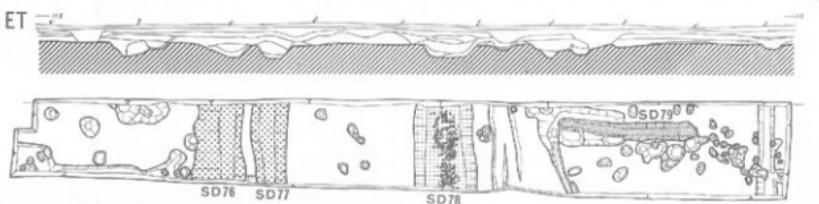
B T. C T. 平面図 (1:200)

0 10m

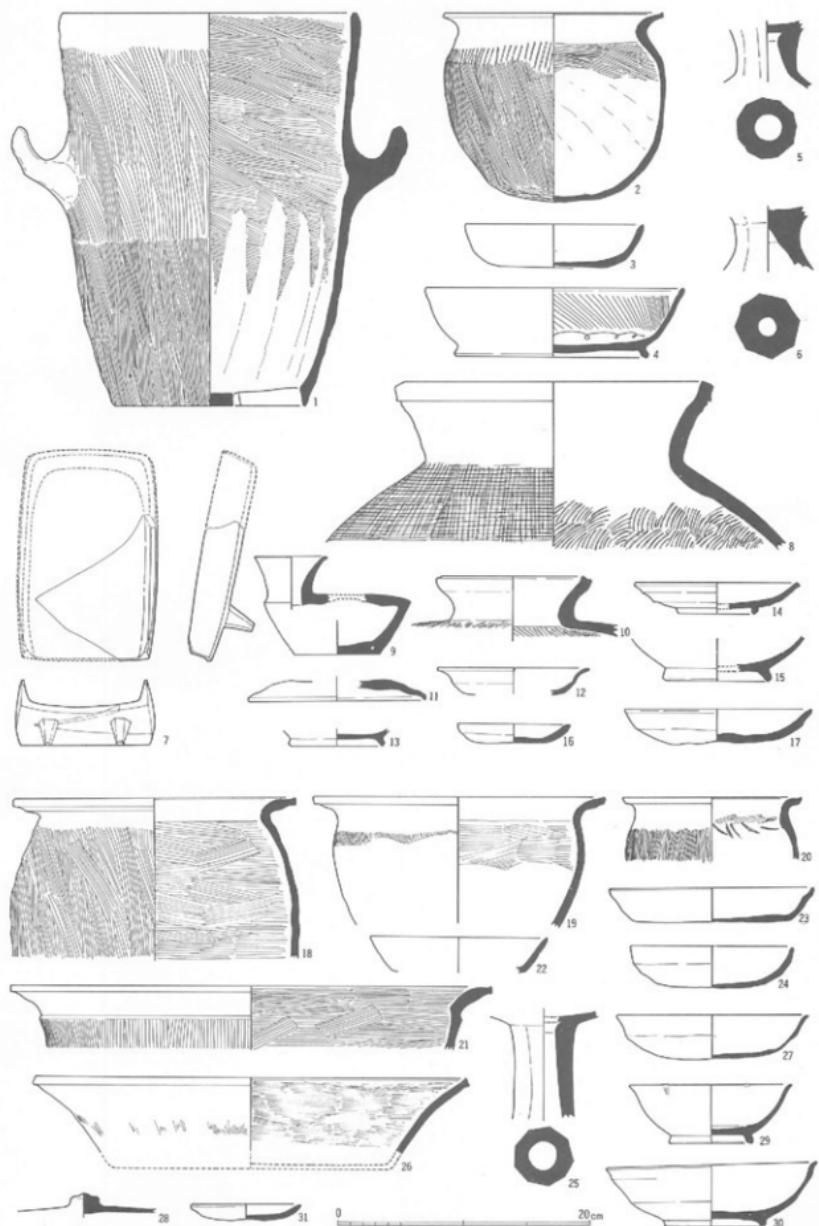
DT



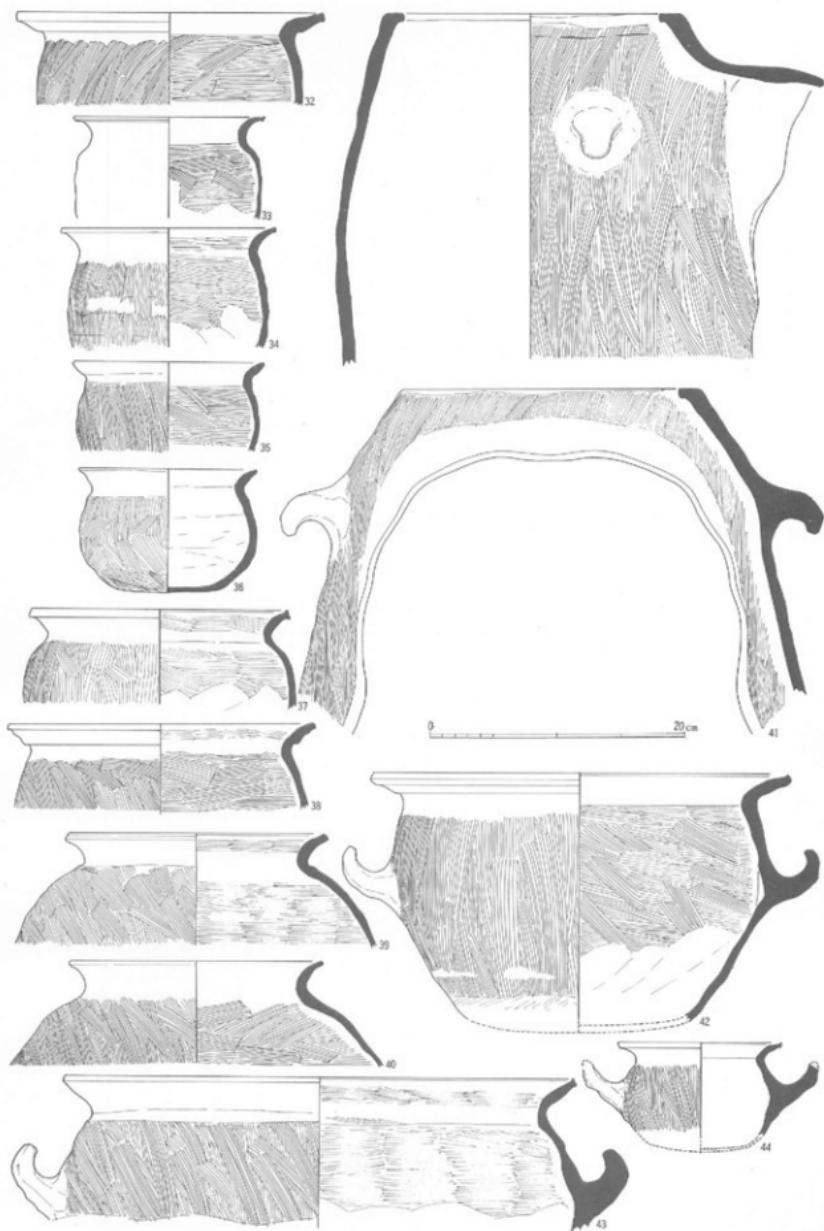
ET



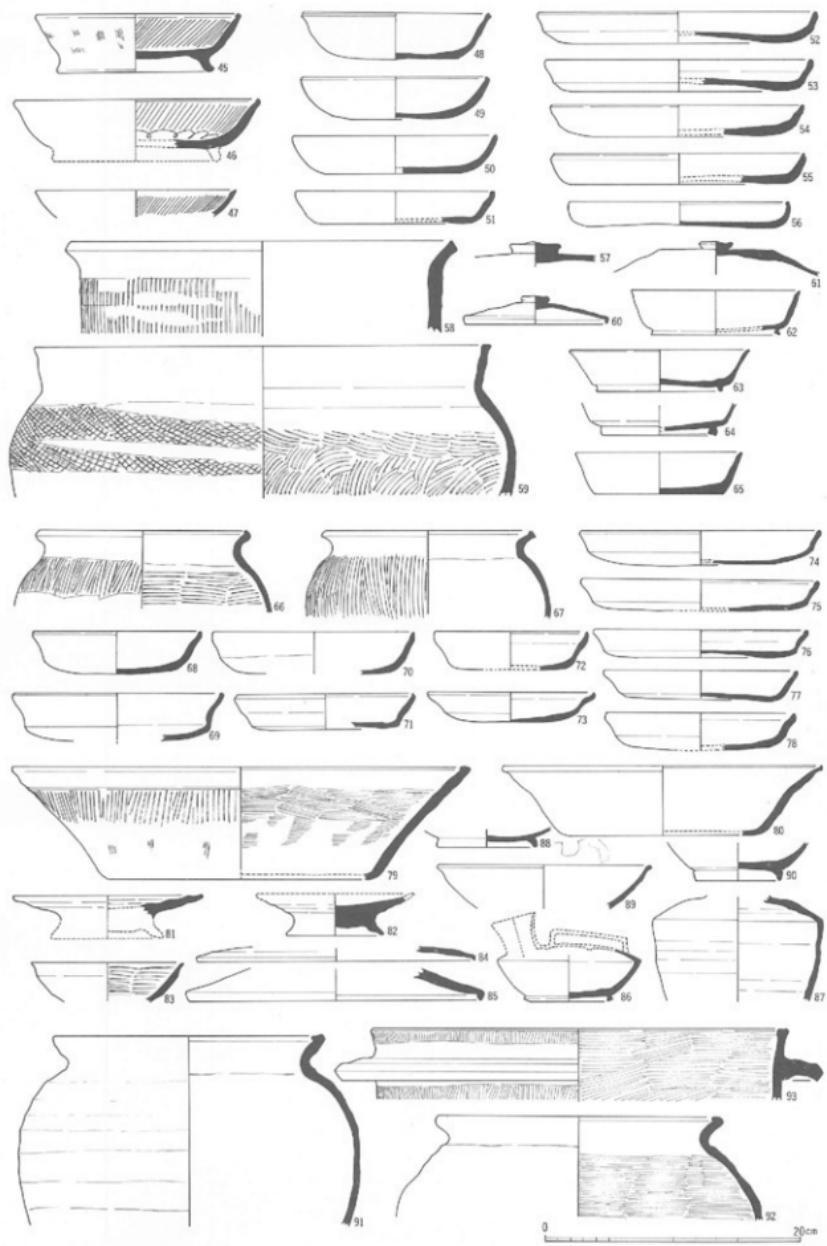
D T . E T . 平面図 (1 : 200)



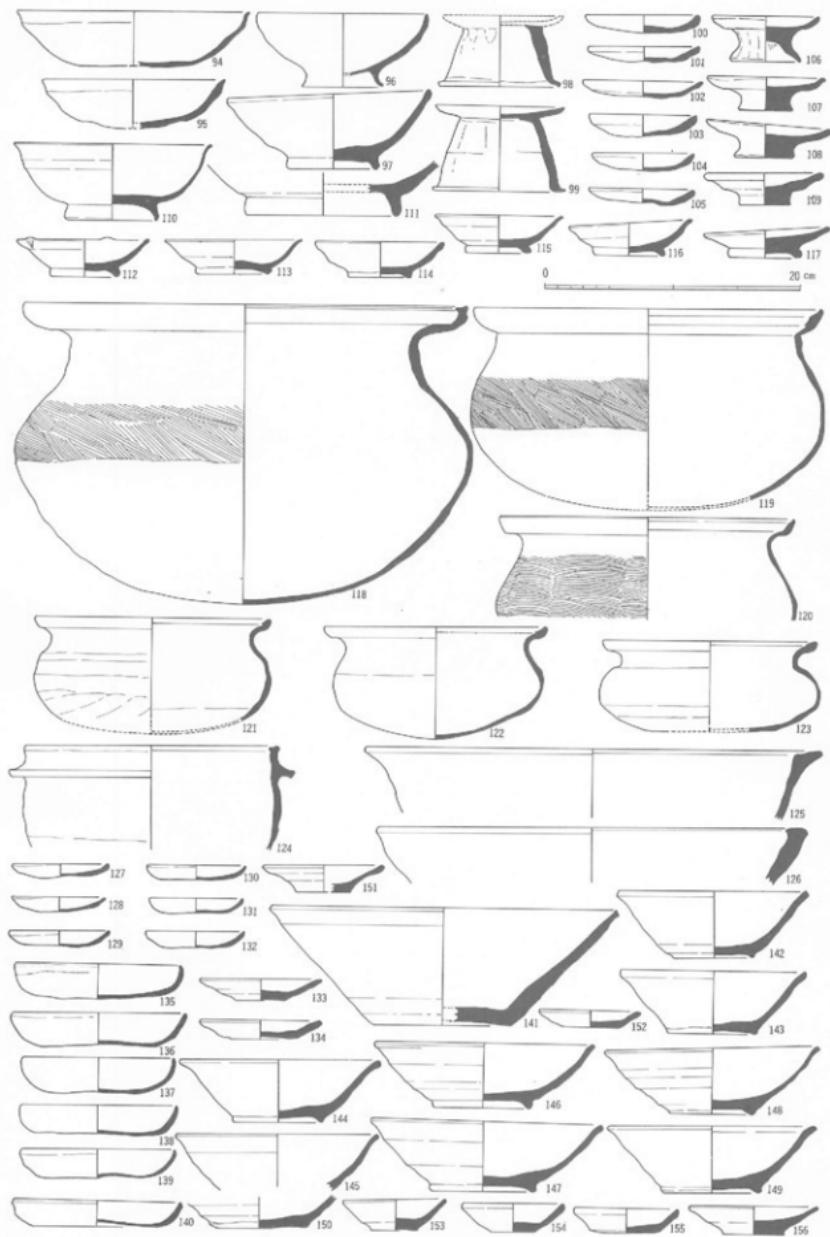
A T., B T. 土器実測図 (1 : 4) A : 1~17, B : 18~30



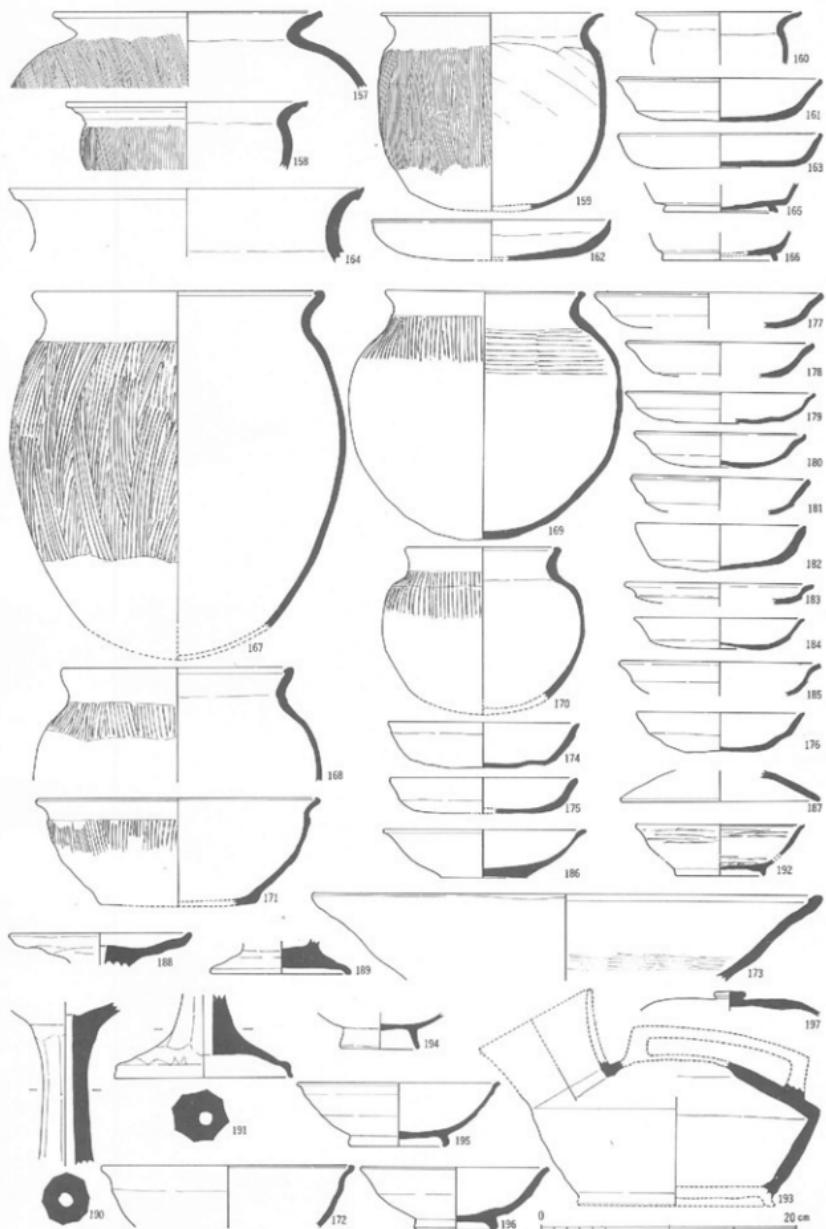
C T. 土器実測図 (1 : 4)



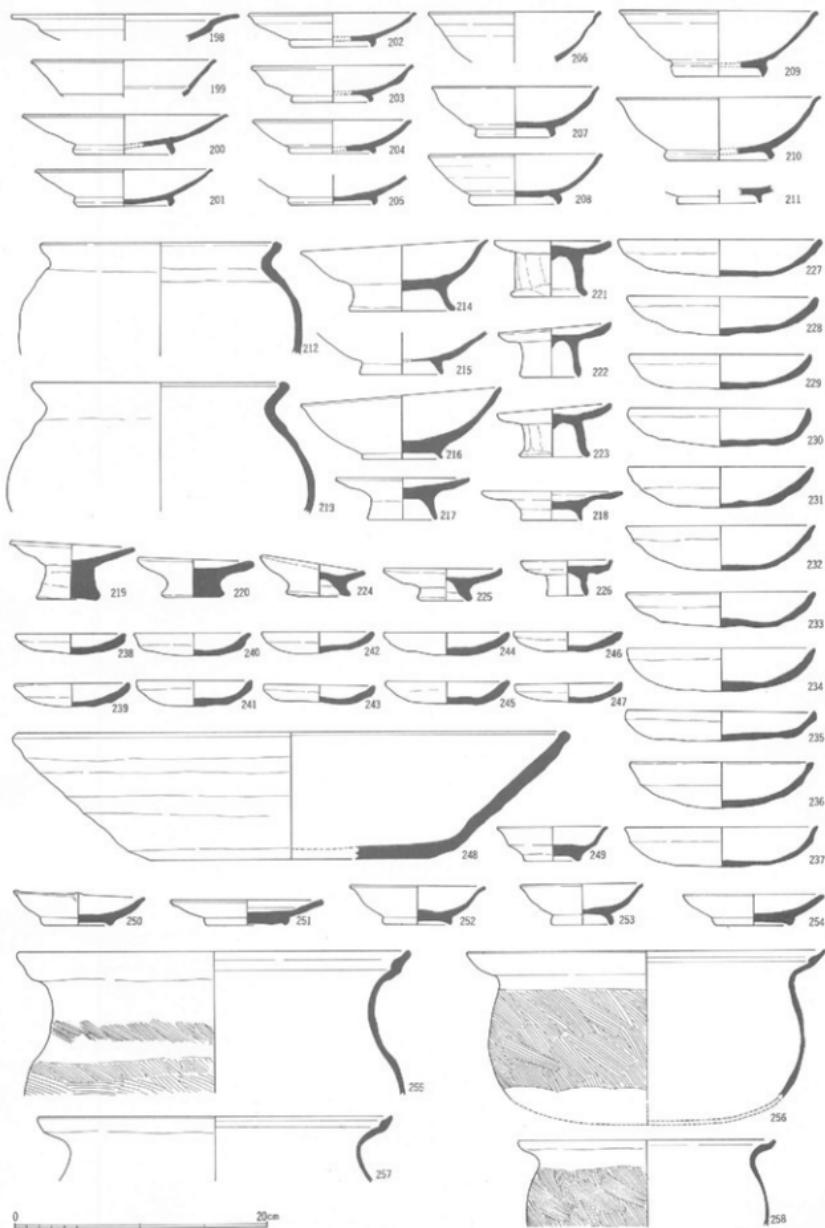
C.T. 土器実測図 (1 : 4)



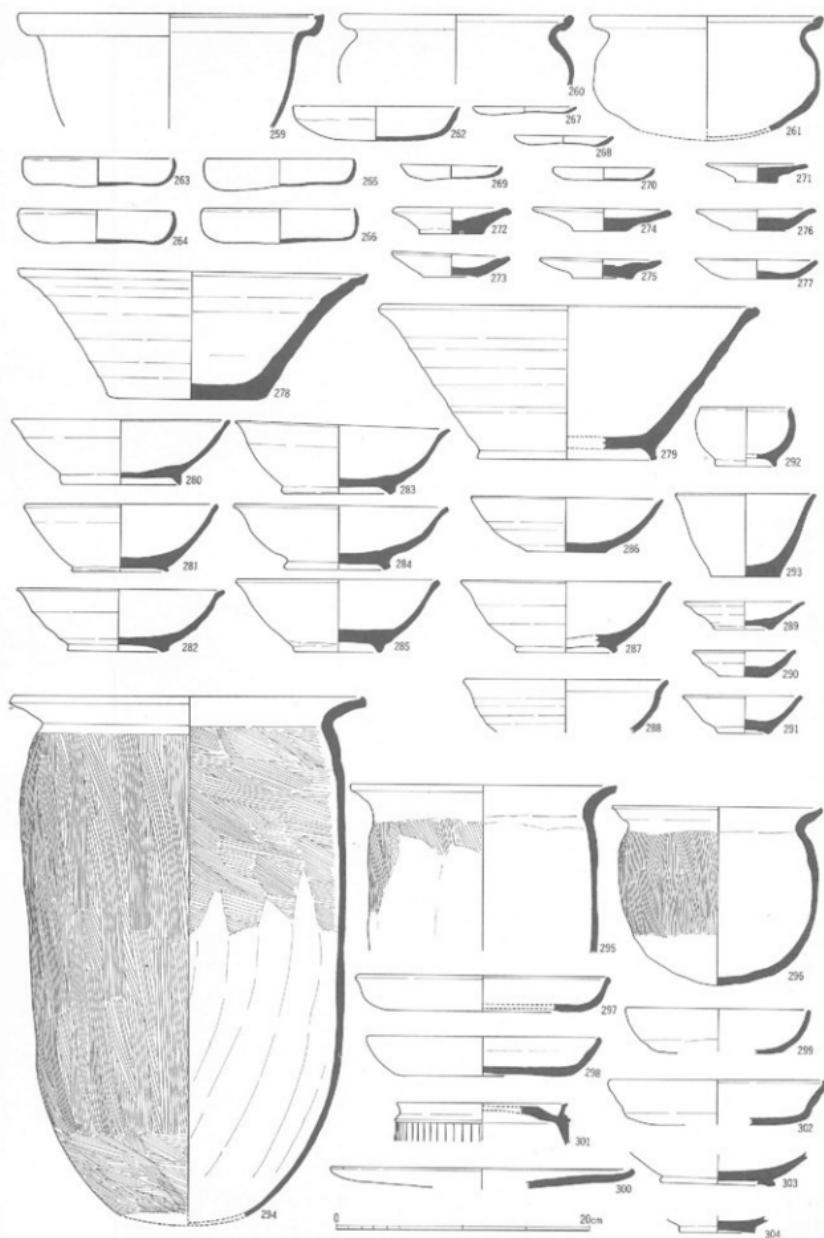
C T. 土器実測図 (1 : 4)



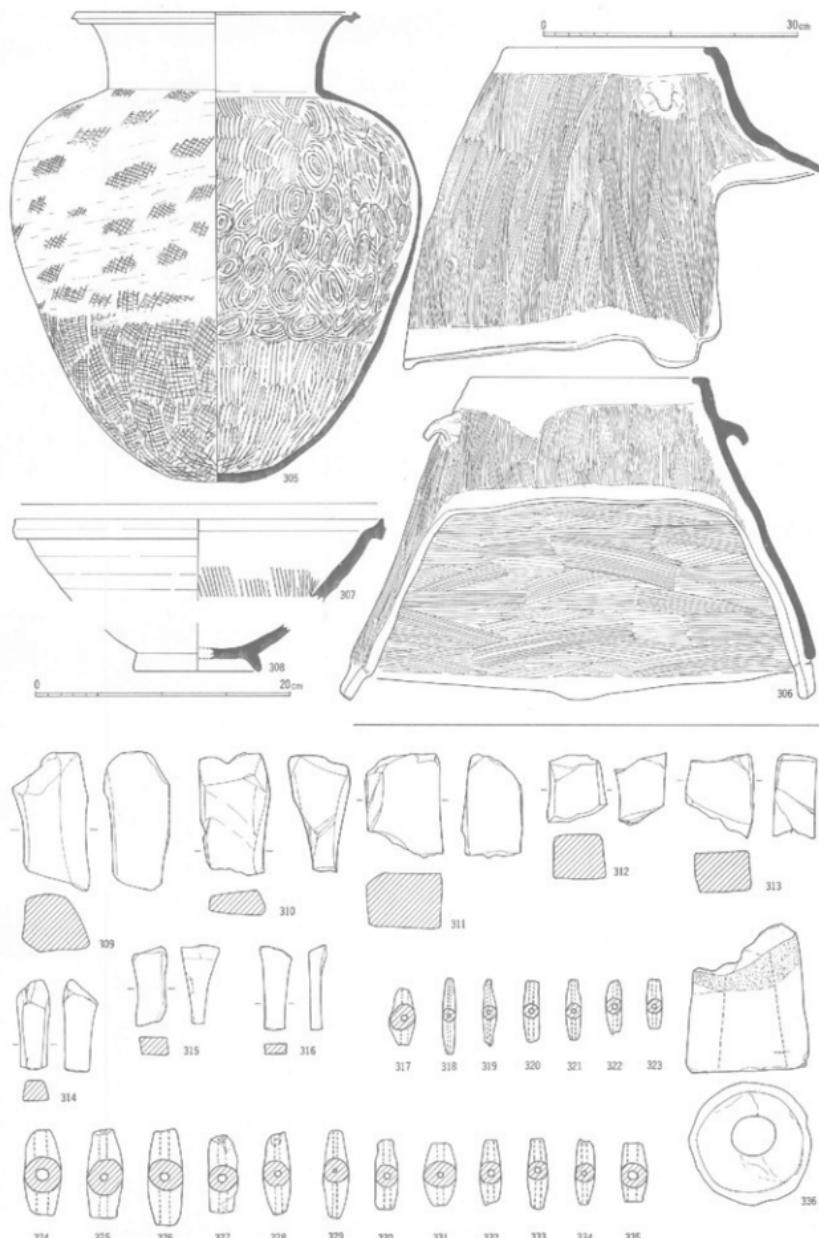
D.T. 土器実測図 (1:4)



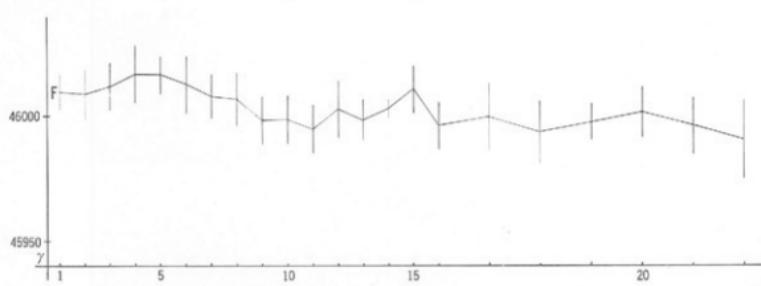
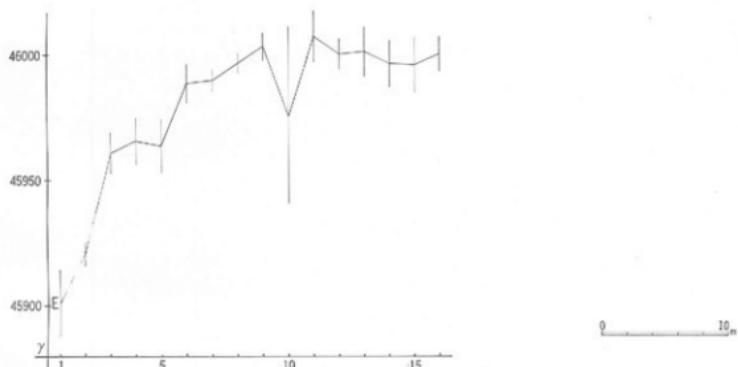
D.T. 土器実測図 (1 : 4)



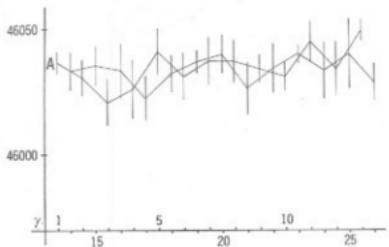
D.T., E.T. 土器実測図 (1 : 4)



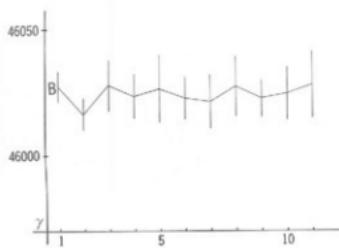
E.T. 土器、石器、土製品実測図 (1:4, 305・306のみ 1:6)



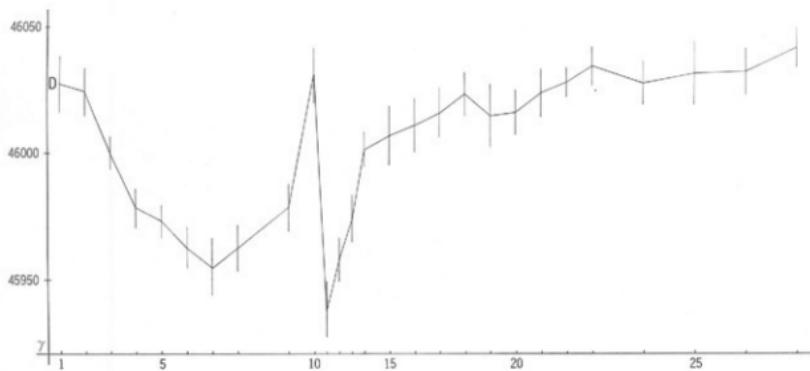
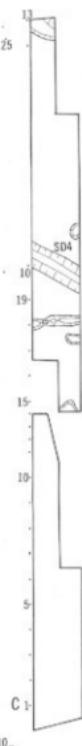
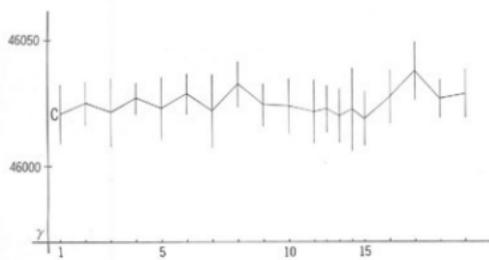
磁気探査地点および測定値表



A1
14



B i



磁気探査地点および測定値表



遺跡遠景



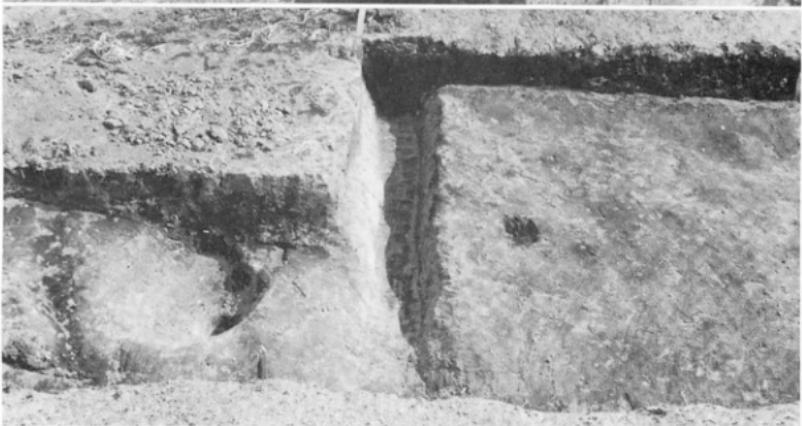
斎王の森



Aトレンチ（南より）



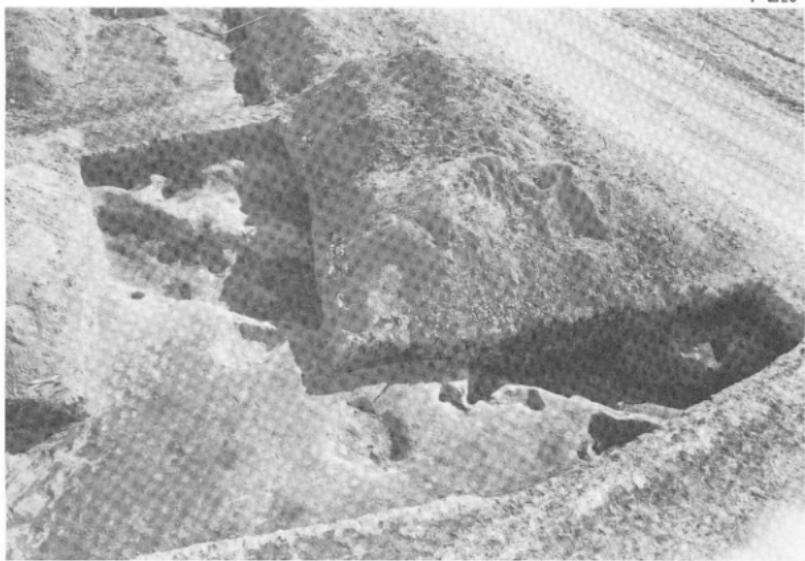
Aトレンチ（北より）



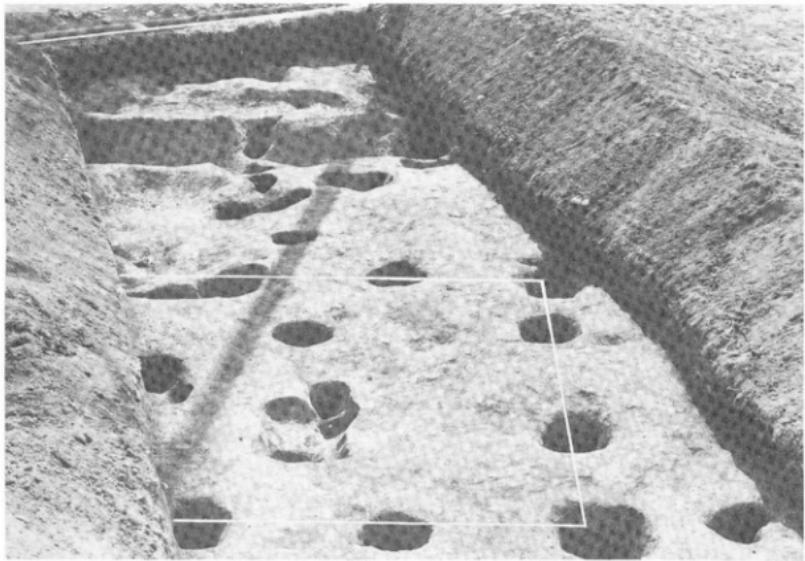
S D 2



S D 5



S D 7



S B 10 (北より)



Bトレンチ（東より）



（西より）



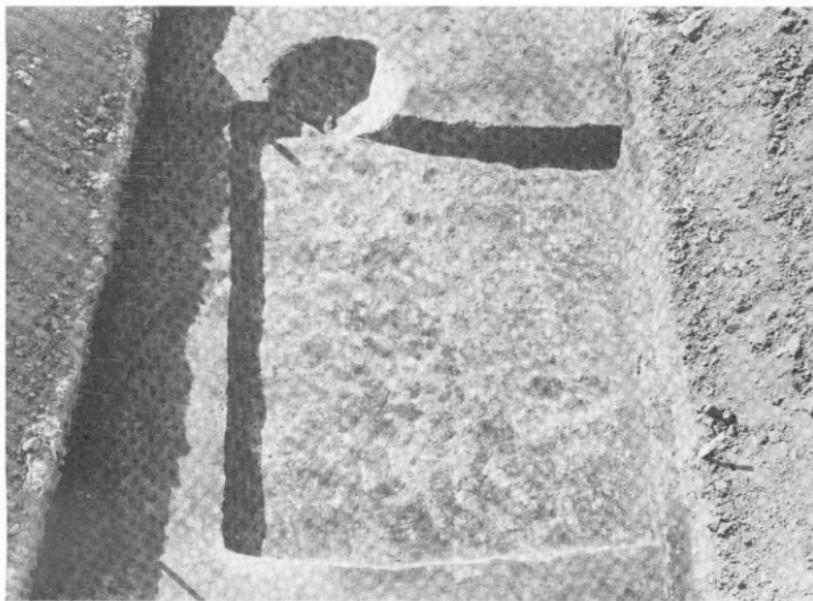
Bトレンチ（西より）



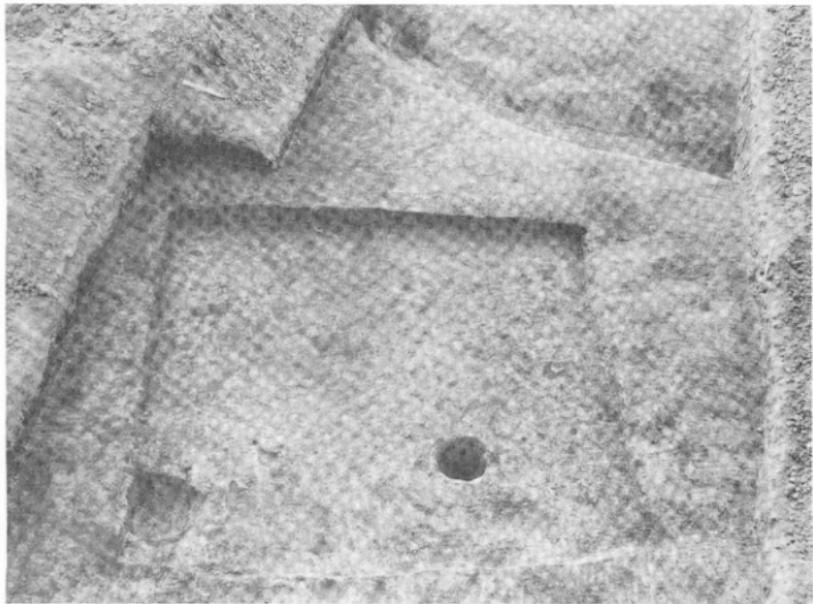
Cトレンチ（西より）



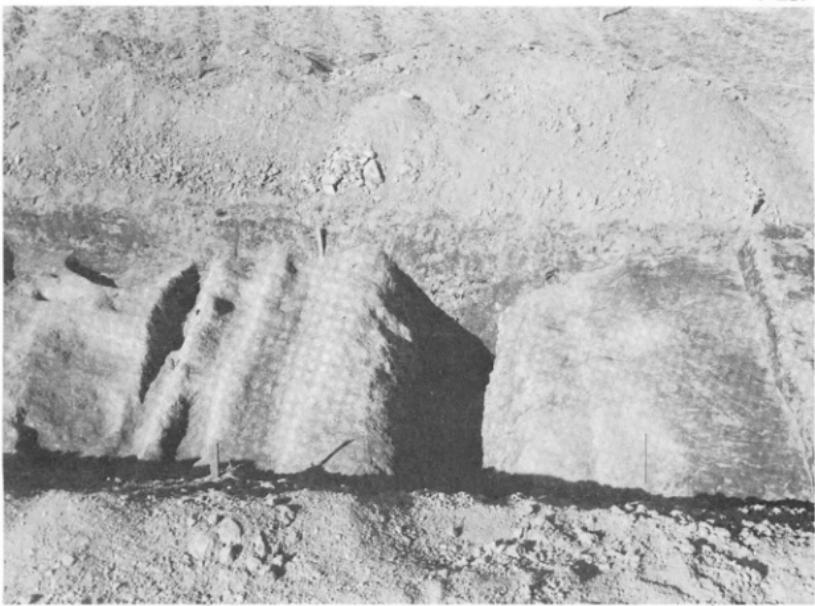
Cトレンチ（東より）



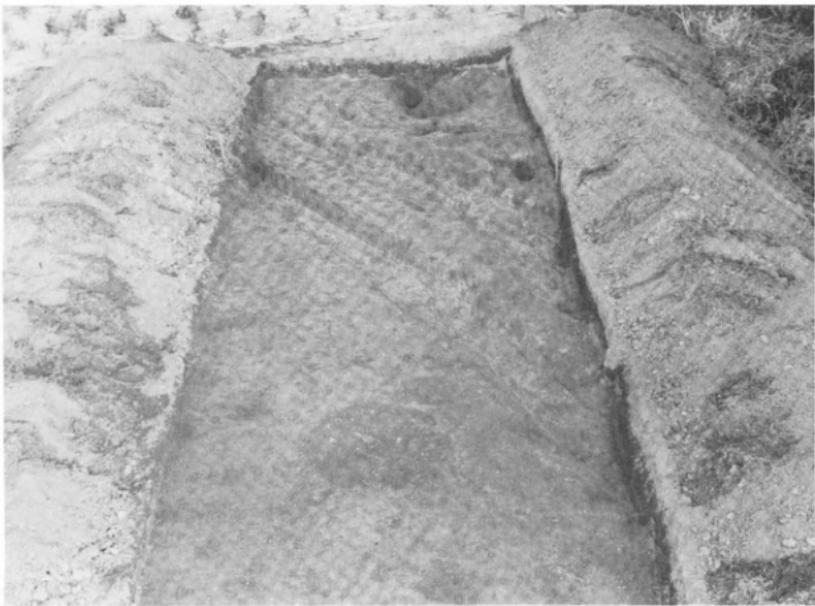
S B45



S B60



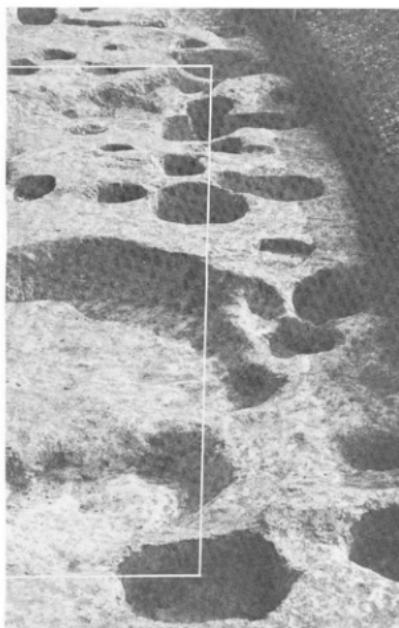
S D38 • 40



S D47 • 48



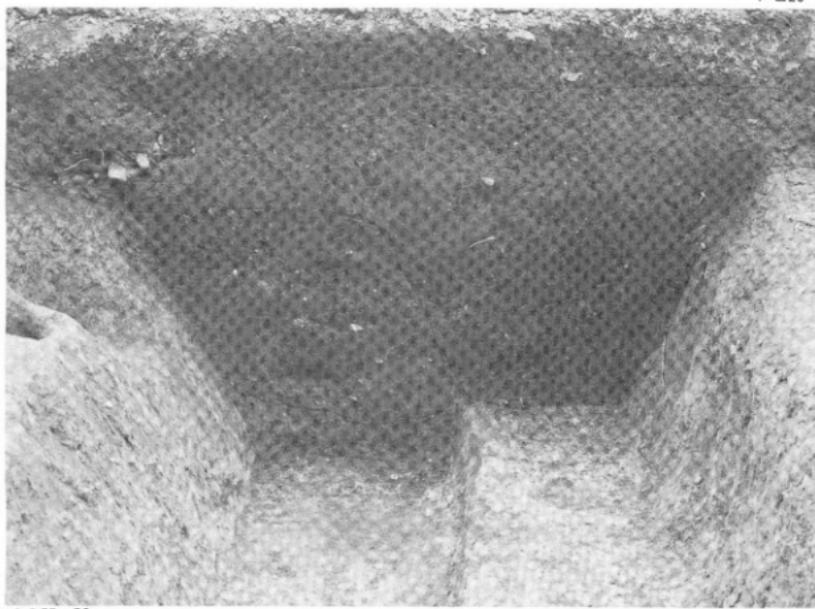
Dトレンチ（西より）



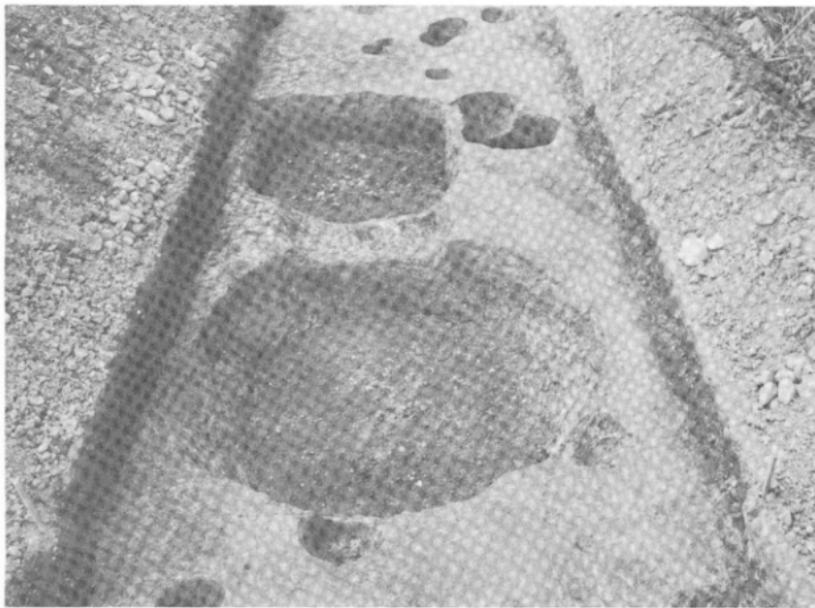
S B 65



Dトレンチ（西より）



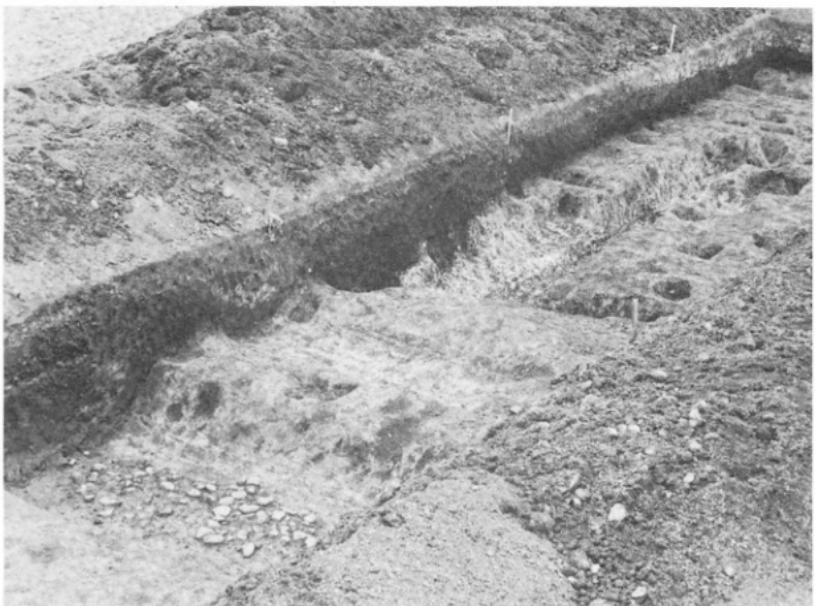
S D55 • 56



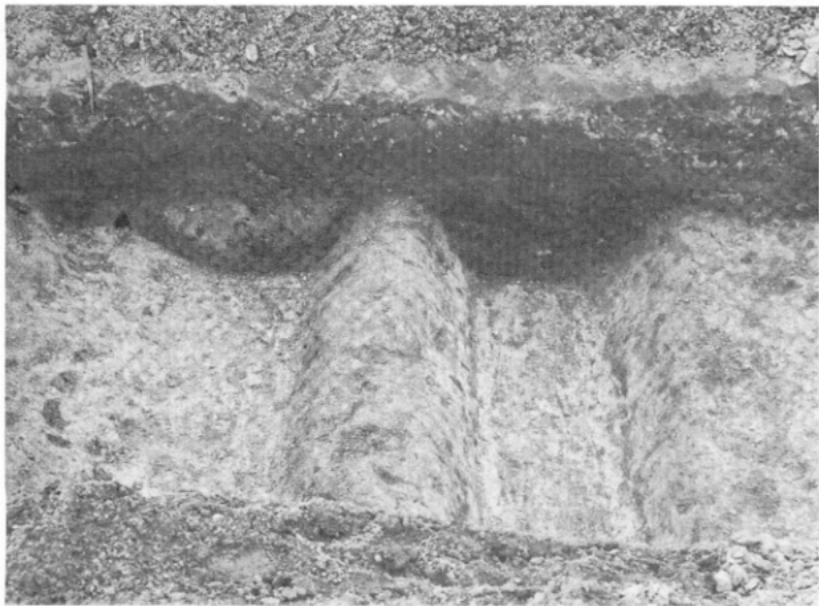
S E64 • 65 • 66



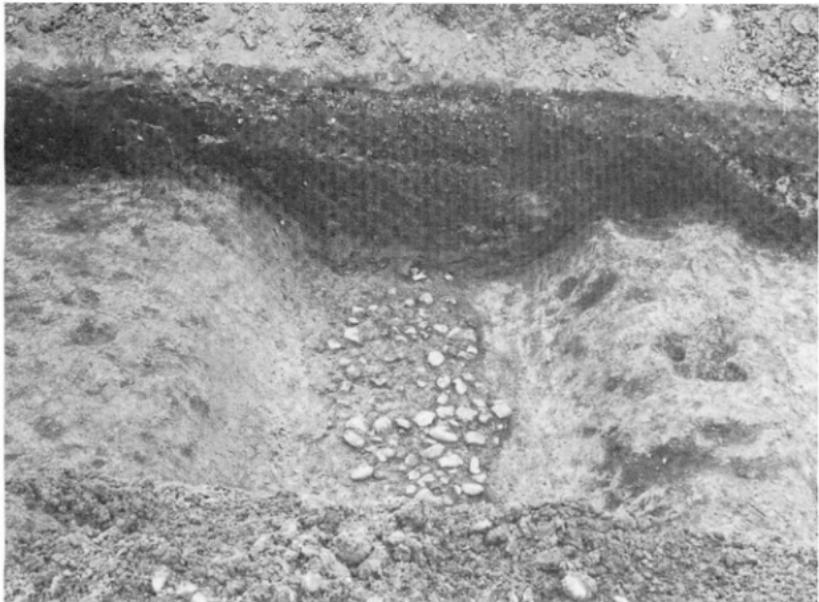
E トレンチ



E トレンチ、S D78・79



S D 76 - 77



S D 78



2



4



45



296



48



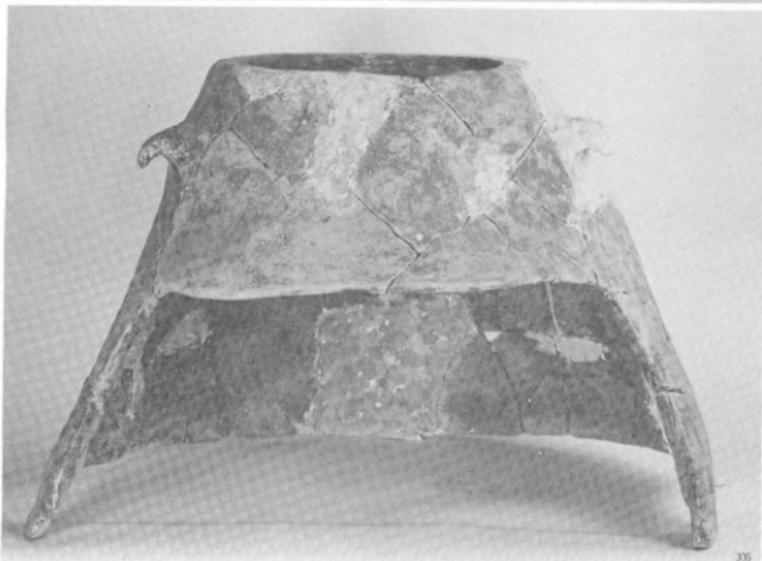
3



161

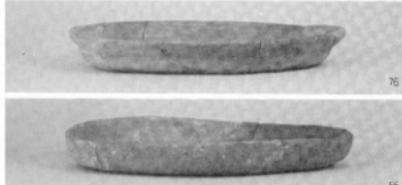
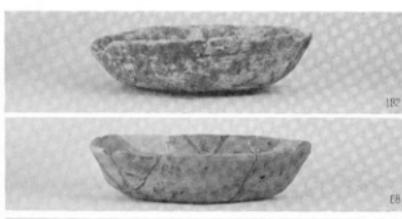
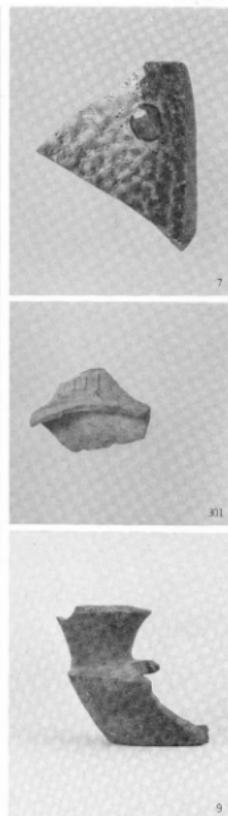


63

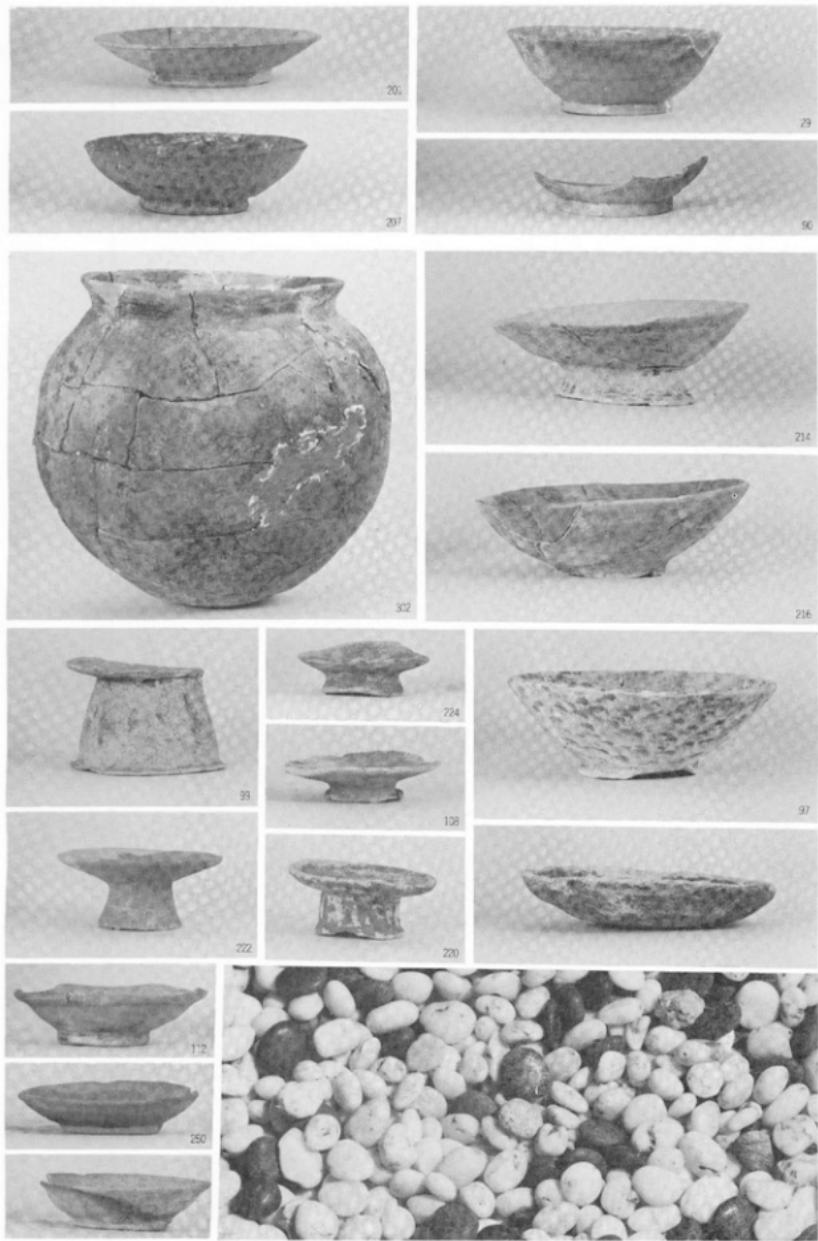


305

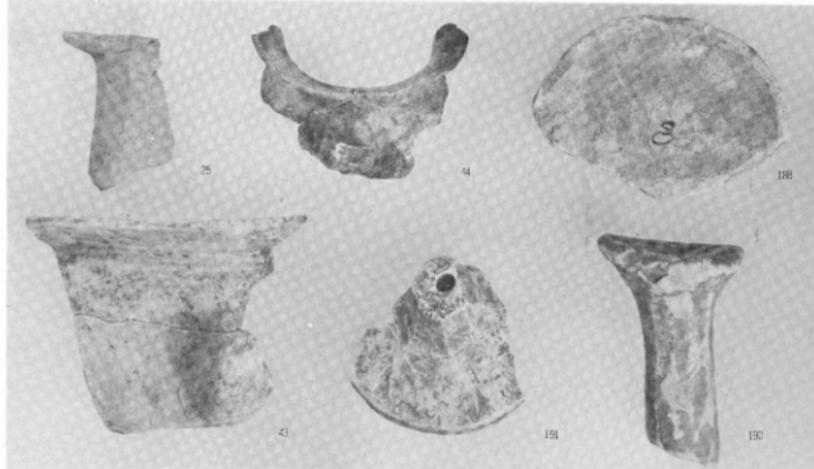
奈良時代土器 (1:3)



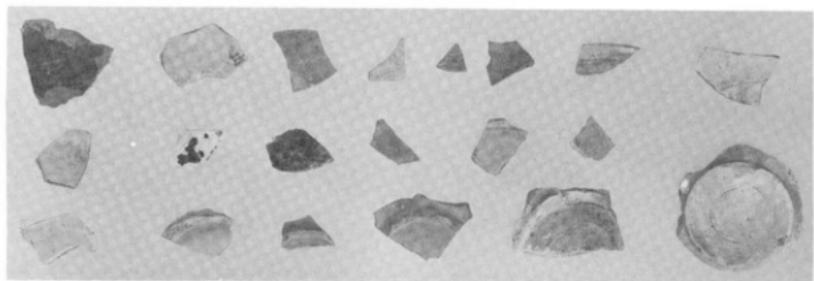
奈良時代土器（上段） 平安時代土器（下段）（1：3）



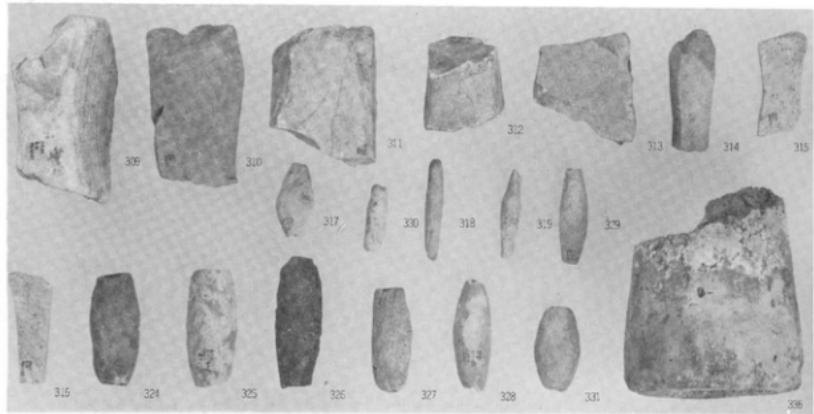
平安時代土器 (1:3)・玉石



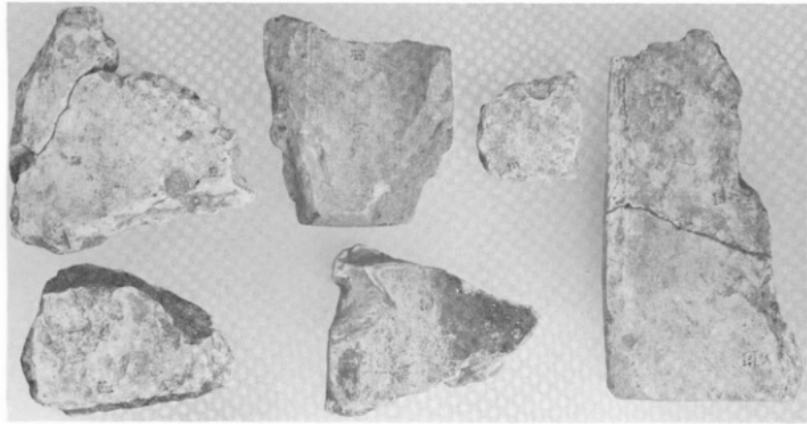
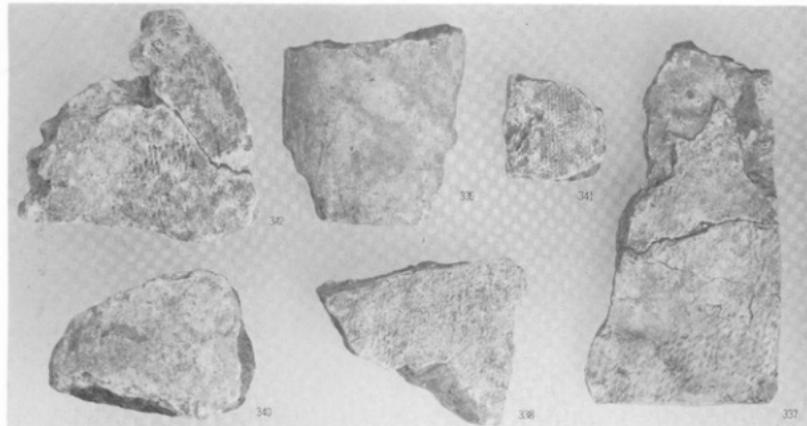
高杯・甕 (1:3)



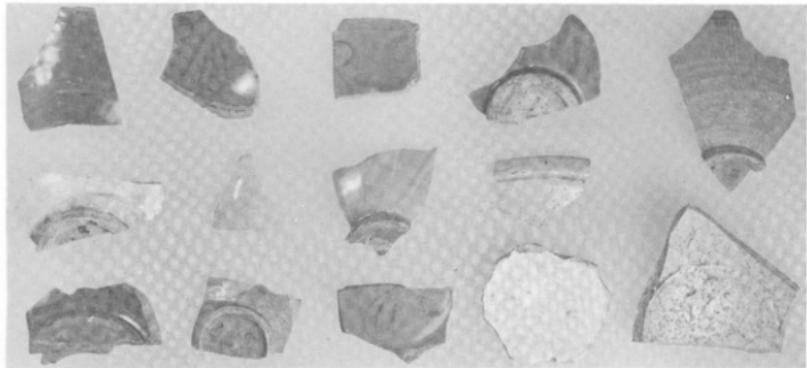
綠釉片 (1:3)



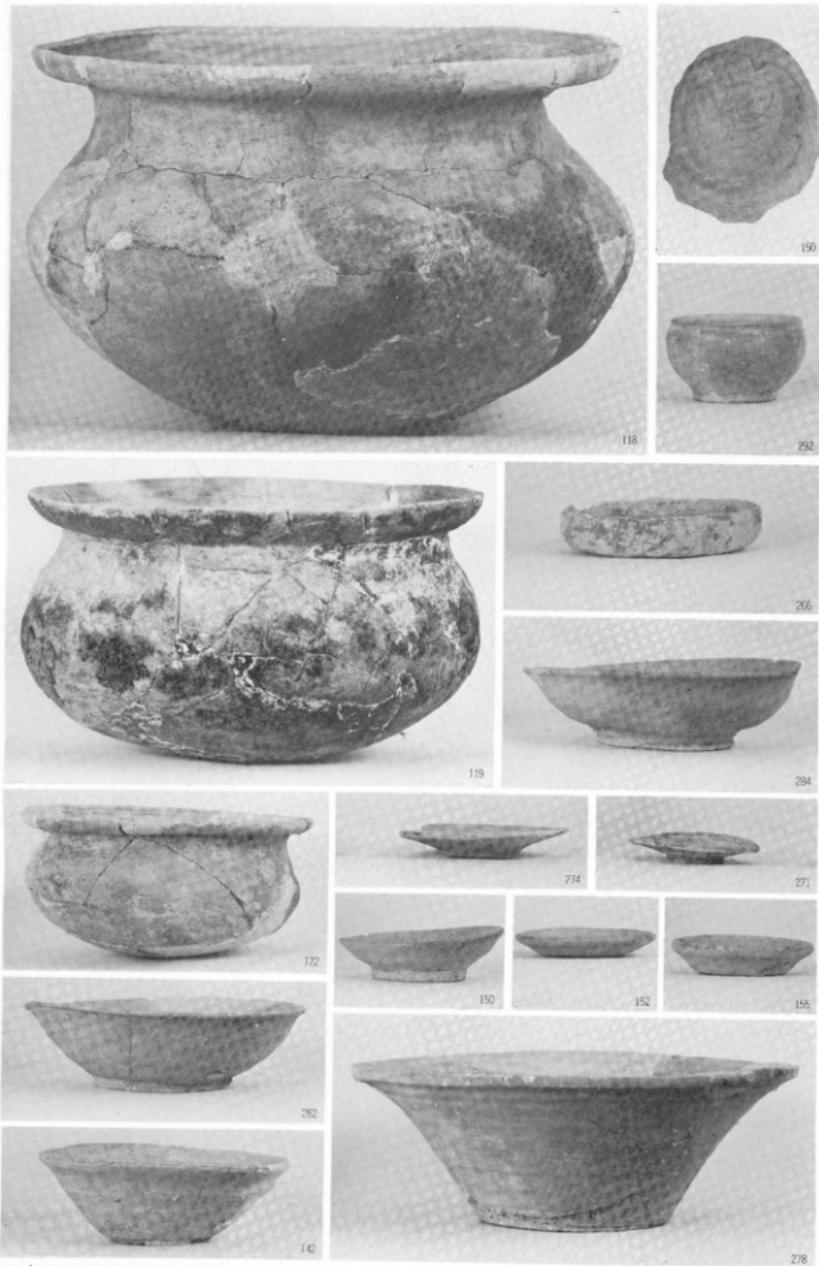
砥石・土錐・トイゴ羽口 (1:3)



瓦片 (1/3)



磁器片 (1/3)



鎌倉時代土器 (1 : 3)

三重県埋蔵文化財調査報告21

斎王宮跡発掘調査報告 I

昭和49年3月31日

編 集	三重県教育委員会
発 行	三重県文化財連盟
印 刷	オリエンタル印刷株式会社

